

反障害通信

20. 8. 18

98号

国家主義が世界を跋扈している——コロナウイルス対策のなかで 浮かびあがってきた、「自粛」という抑圧とエゴイズム——

コロナウイルスの感染症対策のなかで社会のこれまでの蓄積されてきた矛盾が、はっきりと露呈してきています。

経済優先のコロナウイルスの感染症対策という失政

日本においては、第二次安倍政権がアベノミクスなるもののかかげ経済優先の政策を取り、医療や福祉の切り捨てをしてきた歴史がありました。で、この問題が起きてきたときに、国威の発揚としてのオリンピックの開催と、経済的なことを考え、初期始動が遅れたという問題があります。そして、「日本の誇るクラスター対策」という、国家主義的な発想で、検査数を増やそうとせず、古いデータですが、7月28日時点で、人口比（百万人比）の割合で、世界の215国・地域のなかで159番目というデータがあります（米、ウェブサイト worldometer）。安倍首相は、以前から繰り返し「世界に誇る日本」という国家主義的な発想があり、外国の対策から学ぶということをしてきませんでした。そして、このクラスター対策がいまだに生き続けて、検査数が増やそうとしないということがあります。そして、経済優先で、GoToキャンペーンという経済的なことにお金を使っても、医療にお金をきちんと注がないという経済優先のことが、まさに失政の根本的な問題としてあるのです。感染症対策は、医療を基礎に、感染を抑え込むということをししないと、経済の再生などあり得ないという当然のことが、分かっていないのです。

エゴイズムと「自粛」という抑圧」というコインの裏表のようなこと

さて、この問題が起きて、テレビの報道や新聞の報道を追いかけているのですが、そのなかで、動き回っている若いひとたちのあからさまな「自分たちは重症化しないから関係ない」という発言が出ていました。そもそも、若いひとたちのなかにも重症化するひとがいるのです。そのあたりはマスコミの報道の仕方にも問題があったのですが、確かに総体的相対的に高齢者や持病をもっているひとが重症化しやすいということがあったのですが、それにしても、日本的文化として本音と建て前のつかいわけのようなことがあり、このような露骨なエゴイズムのようなことを、テレビの取材で顔をさらして発言するという事態に驚きがありました。ですが、そもそも、日本の教育が受験競争のなかで、エゴイズム教育を進めて来たのです。さらに、日の丸・君が代教育や愛国心教育という、国家主義的な教育そのものが、他民族・他国にたいする排外主義的教育というエゴイズム教育になっているという側面をも押さえる必要があるとも思っています。安倍ヤジ首相は、日教組出身の国会議員の質問の際に、答弁席から「日教組、日教組」というヤジを飛ばしていたのですが、まさに、このような自民党歴代の日教組の「偏向教育」批判のなかから、国家主義的な偏向教育を完成させ、その「成果」としてのエゴイスト養成となっていくのだと思います。もちろん、みんながエゴイストになっていくわけではありません。そんなことに背

を向ける多くのひとがいますし、みずからドロップアウトしていくまっとうなひともあります。こんにち、安倍政権を支える付度するエリート官僚たちは、まさにこのエゴイスト養成教育の流れに沿ったひとたちだと言えます。そういうなかで政治の腐敗が進んでいきました。

さて、もうひとつ、逆な動きがあります。逆といっても、コインの裏表のようなことなのですが、安倍首相自身もそうなのですが、絶対主義的な地方自治体の首長の動きがあります。小池東京都知事や吉村大阪府知事の動きです。記者会見を見ていると、「夜の街」とかクラスターを起こしたところを叩くことによって、自分たちの施策というか支持を拡げよう維持しようという動きがあります。誰かをスケープゴートにしていく、差別的・排外主義的なところに根ざす全体主義的動きなのです。それは往々にして「自粛」という名に進められます。これは政治の無策の裏返しとしての責任転化の自己責任論になっているのです。

そこで、お盆にあわせて、PCR検査を受けて実家に帰ったひとが、近所のひとから早く帰れという手紙を押しつけられたという話もでてきます。まるで、帰ってきたひとがエゴイストのように全体主義的な「自粛」を求めるひとから、批判されるというようなことが起きているのです。これは、政府がはっきり方針を出さないで、「自己の判断で」と責任をおしつけたことで起きている事態です。

誤解のないように断っておきますが、全体主義というのは、自己犠牲的なことではないのです。全体の利益のなかに自己の利益（たいてい錯認です）を見だしそれを追求する、そこで犠牲になるひとのことを顧みないエゴイズムなのです。

コロナウィルスの感染症対策はどうあるべきか？

コロナウィルスの感染症対策について、繰り返し錯綜した議論がなされています。とくに、体制に順応する政府の施策にたいする付度発言として、政府が検査態勢を拡げないことの擁護発言として、検査を拡げることのデメリットの指摘が出ています。これは、偽陰性があるから、検査をいたずらに拡げても拡大は阻止できないという話です。ですが、確率が70%あるのなら、検査をどんどん拡げていけば、感染者数の抑制の効果はあります。そして、「陰性証明などありえない」というところを押さえてそれでも感染者数を押さえるために検査をどんどんしていくしかありません。勿論、そもそも経済の構造自体の再編というところまで踏み込んだロックダウン的なことや規制を強めるという政策の選択肢もあるのですが、とりあえず「検査！検査！」ということが今の方針です。ワクチンや治療薬という不確定なことに頼って無策の政治を続けていると取り返しのつかない事態に陥っていく、それは「政治」ではないのです。勿論、そのような政治の無策の中で、民衆は政府の右往左往をしりめに、カッコ抜きの自粛という、「自らが感染するよりも感染させたくない」という思考がはたらき行動の抑制の動きも出ています。それを良いことに、政治が自己責任などという事を言うのは、自己の存在の否定以外のなにものでもないのですが。

国家主義の跋扈と資本主義の矛盾の露呈

さて、この問題が起きているときに、どさくさに紛れて、緊急事態条項をいれた憲法改正とかイージスアショアの破綻という失政をごまかす「敵基地攻撃能力」の議論とか出てきています。まさに失政の破綻の際の、そのごまかしとしての敵をつくる国家主義的な突

き出しなのです。

それは、世界のあちこちの政権の国家主義の突き出しにも現れています。

アメリカのトランプ大統領、プーチンのロシア、習近平の中国、そして、トランプをまねるようないろんな国の大統領・首相も出てきています。まさに国家主義的なことが跋扈してきているのです。

前に、エゴイズムの話を書きましたが、国家主義の背景には資本主義の精神があります。資本主義の精神は「我が亡き後に洪水よ来たれ」なり「今だけ、ここだけ、自分だけ」ということであらわされているのですが、これがまさにコロナウィルスの感染症対策を妨げるものとして出てきています。感染症対策それ自体の可否は、医療的なことをきちんと基礎に据えてそれを押さえ込むことによって経済も回していくという基本方針をとれるかどうかですが、混乱は国家主義的なところの跋扈の中で起きてきています。グローバルゼーションの時代には、感染症は国境を越えて進むのですから、国際的協調がもとめられるのです。昨今人類を滅ぼすのは、細菌やウィルスとか言われてきていました。まさに、戦争などする、できる時代などではないのです。どうして、戦争をなくせないのか、核兵器の廃棄がなせないのか、軍隊などなぜあるのか考えると、国家という幻想へのとらわれを問題にしていかななくてはなりません。国家主義の批判の中から、全ての軍事同盟の破棄と、軍事的なことを縮小し、軍事的緊張関係をなくし、感染症対策を国際的協調のなかでなししていくことが今必要になっているのです。

(み)

(「反差別原論」への断章) (26) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 98 号」アップ(20/8/18)

◆サブホームページ「反差別資料室 C」の文献表、見れないままにしていたのを、新しい分を付け加えて更新しました。いくつかの見れなくなっていた文も見れるようにしました。ちゃんと原因が付きとめられれば解決できるのですが、わたしは IT 関係にも疎く、結局、随時修正していくしかありません。

◆「反差別資料室 A」の A はアーカイブです。「吃音」に関することや、フェミニズム関係の学習をしていたときの文や障害問題で論形成をしていっていた時の論攷を載せています。論的な深化を軸にしている今よりも分かりやすくなっているかもしれません。良かったら読んでください。ただ「反差別資料室 A」は、ワープロで打っていた原稿で、校正がきちんとできていない原稿があります。随時校正を入れていきます。

◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています横書き版は最後、縦書き版では 2P の連絡先から連絡をお願いします。

◆母の介護の反省記「ソフトクリムのようなウンコの話—母の介護の記録と反省から介護労苦論批判のために—」をアップしました。<http://taica.info/softunnko.pdf>

表題も含め、まだ迷い続けているのですが、いろんな意味で必要性を考えとりあえずのアップです。

読書メモ

ローザに戻りました。「寄り道」をしていて、ローザ学習の基本的観点ということ、踏み外してしまいました。ローザの学習は、ローザとの対話なのですが、ローザの文は、アジテーション的な文で、その魅力に引き寄せられたことがあり、膨大な引用中心の学習メモになってしまいました。もう一度編集し直して、読める程度の文にコンパクトにまとめようかと思ってもいたのですが、とにかくこのままに出します。ローザとの本格的対話は、一連の学習の後になってしまいます。

たわしの読書メモ・・ブログ 542

・ローザ・ルクセンブルク／高原宏平・田窪清秀・野村修。河野信子・谷川雁訳『ローザ・ルクセンブルク選集 第2巻（一九〇五——一九一一）』現代思潮社 1969

ローザの学習四冊目です。ローザ・ルクセンブルクの選集二巻目。主要論文だけピックアップして読もうかと思ったのですが、簡単なメモにとどめて全部読みます。

まず、目次を上げます。

ロシアでの革命

第一幕のあと

「弱小民族」の問題

革命の火照り

ドイツ社会民主党イェーナ大会での演説——メーデーに関する討議のなかで／I 一九〇五年九月二一日／II 一九〇五年九月二一日／III 一九〇五年九月二二日——政治的大衆ストライキにかんする討議のなかで

極端な挑発

問題の解決

ドイツ社会民主党マンハイム大会での演説／I 政治的ストライキについての討議のなかで／II 労働組合と党の関係についての討議のなかで

労働組合政策の二つの方式

メーデー

ドイツ社会民主党ロンドン大会での演説／I 挨拶／II 一九〇七年五月二五日の演説／III むすびの言葉

社会主義インターナショナル・シュトゥットガルト大会での演説／I ミリタリズムと国際紛争との問題にかんする委員会での演説

SDPニュールンベルク大会での演説／I 党学校にかんする討議のなかでの演説／II メーデーにかんする討議のなかでの演説／III 予算案承認にかんする討議のなかでの演説

つぎはなにを

種まきの時期

SDPマクデブルク大会での演説／I バーデン州予算承認にかんする討議のなかで／II 選挙権問題にかんする討議のなかでの第百号議案提案理由の説明

政治的大衆ストライキと労働組合／ハーゲンにおける自由労働組合連合の総会での演説
モロッコをめぐる

モロッコ問題のパンフレット

大衆的ストライキ・党および労働組合

註

さてメモに入ります。(表題の後に来る記号で、○は、巻を通しての帯に各巻の紹介で上げられていた論攷です。◎はその内で、わたしが再読が必要と押さえた論攷。□は○ではないが、重要な論攷。)

ロシアでの革命

1905年ロシア革命の直後に書かれた文です。

「革命の勝利は、ただの一撃だけで期待できるものではない。」1P・・・長い助走の始まり
「ロシアのプロレタリアートはこの日はじめてひとつの階級として政治の舞台に立った。ついに戦場に姿をあらわしたこの階級こそ、ツァーリズムをロシアから駆逐し、文明の旗をたかくかかげる歴史的な使命をはたすことができる唯一の勢力なのである。」2P

ロシア革命の前史 2-4P

「ロシアにかぎらず、いかなる世界においても、自由と社会の進歩にかかわることがらは、すべて、階級意識をもったプロレタリアートの手中にある。われわれはわれわれの任務をはたさなければならない。」4P

第一幕のあと ○

「多数の大衆が行動を起こすにつれて、マルクスのいう大衆の行動がもつ「徹底性」(註『神聖家族』の言)も深められている。」5P・・・運動の中での徹底性の深化

「それは、いまでは有機的な行動能力をもった全体であり、共通の意志と階級意識に結ばれたひとつの政治的階級である。」6P

「いまこそ、この革命的状況を永続させるための社会民主党本来の任務がはじまるのである。ようやくほんとうの革命がはじまろうとしているときに、闘争の終結と敗北しか見ることができないのは、政治的近視眼(ママ)にほかならない。」10P

「ロシアだけでなく、どの国のばあいもおなじであるが、社会民主党は、乳くさい口先だけの革命屋が創造するのちがって、歴史をうごかす動機や状況を人為的に作り出したりにしない。ただ、プロレタリアートの立場から、現在の状況の歴史的意味づけを行い、それからひき出せる帰結を意識化し、それを今後の闘争の動機へ発展させるのである。社会民主党がなしうることは、また、なさなければならないことは、どのような状態であれ、状況をどこまでも利用しくすことなのだ。」11P・・・自然発生性への依拠(レーニン主義からすると、拝跪)

「社会民主主義は、つねにあらゆる個別的要因をこえた最終目的をはっきりかかげている。したがって一局面の直接的勝利や敗北に眼がくらんで、世界の終末を見たりすることは、けっしてありえない。要するに、社会民主党にとって、労働者階級が政治的自由という目的のための手段であったりするわけではない。逆に、政治的自由が労働者階級解放のための手段なのである。」11-2P

「弱小民族」の問題 □

この論攷はローザのナショナリズム的などらえ返しで留意する論攷。階級闘争至上主義

になっているのでは？

「インターナショナルな労働者階級を資本主義の軛から解放するためには、どうしてもそのまえに、まず、このもっともおくれた近代資本主義国家の中世紀以来の鉄の襁褓を脱がさなければならない。」 13P

弱小民族の列挙 14P・・・ローザのインターナショナルなところで、ナショナリズムの否定の指向。インターナショナルは民族差別に対するたたかいを抜きにして定立しえるのでしょうか？

「ことばや宗教を異にする労働者が、ツァーリズム妥当のたたかいのために、ひとつに団結したのである。」 17-8P

「今日ロシアで市民的自由を擁護し諸民族観の平和を実現するものは、階級意識をもったプロレタリアート以外にありえない。」「ロシアにおいても、市民的自由の問題は、けっしてナショナルな問題にぶつかって崩れてしまうものではない。逆に、ナショナルな問題が健康をとりかえすために、プロレタリアートの革命的階級闘争のなかから生まれる市民的自由が必要なのだ。」 19P・・・市民的自由→階級闘争という図式。階級闘争至上主義になっているのでは？ 民族問題を位置付け直す必要。

革命の火照り

ブルジョア民主主義革命の課題として出てくる8時間労働制と社会主義の実現、他の国の影響での運動の速度を速める。

ドイツ社会民主党イェーナ大会での演説——メーデーに関する討議のなかで / I 一九〇五年九月二一日 / II 一九〇五年九月二一日 / III 一九〇五年九月二二日——政治的大衆ストライキにかんする討議のなかで ○

I

シュミット批判。以前の（日和見主義へ転ずる前の）カウツキー編集の「ノイエ・ツァイト」の編集を巡り、シュミットの党と労働組合の対立の図式に対するローザの批判。シュミットは労働組合主義。

II

労働組合——党の分裂ではなくて、労働組合内部と党の内部の分裂。

III

日和見主義的な運動への制御の動き——状況も読めない、理論もない戯言

「現在、必要なのは組織化ということではなく、なによりもまず革命的啓蒙精神である。このほうがはるかに大切なのだ。」 35P

「今、大衆は闘争をとおして、一步一步、組織をかためている。強力な組織がつくられてからでなければ闘争ができないというのは、弁証法（？）を知らぬ、まったくの機械論にすぎない。逆に、組織は、闘争そのもののなかで、階級対立についての明確な認識とともにうまれてくるのだ。」 35-6P・・・運動——闘いのなかでこそ育つというローザの運動論

極端な挑発

ドイツの艦隊法案の議会主義をかなぐり捨てた拡張主義的な動き批判

註でモロッコを巡るフランスとのせめぎ合いでのドイツ政府の和解政策への転換は、「戦いの準備ができていなかった」から、という押さえ。

問題の解決

「プロレタリアートが、革命の**指導的な**役割をはたす使命をになうのは、その階級的立場から見て、当然である。つぎに、農民よりさきに都会のプロレタリアートの側に立ったのは、陸軍よび海軍の**軍隊**であった。」42P

「かれらは（日和見主義者は）、革命にともなう外面的な戦闘の騒音に圧倒されて、革命のもつもっとも強力な社会的歴史的にもっとも重要な側面、すなわち**革命の政治的教育効果**ということを見おとしている。革命によって教育されるのは、プロレタリア大衆のほか、広範囲の農民や小ブルジョア層だけではない。人民大衆のなかで「王のおしきせ」を着ている部分でも、この教育は行われるのである。」43-4P

「あたらしい政治問題や社会問題を投げかけかける革命は、それらの**問題解決をすでにみずからの胎内にはらんでいる**。ロシアでの革命の経過は、このことをくりかえし証明した。ドイツの支配階級は、現在、新しい陸軍法案や艦隊法によって、亡霊どもを社会の表面に呼び出そうとしているが、やがてかれら自身のこの亡霊どもに手をやくときがくるであろう。ロシア革命は、こうした支配階級にたいする**警告**であると同時に、われわれの陣営のなかの小心な日和見主義に向けられた警告でもある。」45P

ドイツ社会民主党マンハイム大会での演説／I 政治的ストライキについての討議のなかで／II 労働組合と党の関係についての討議のなかで ○

I

「ロシア革命は、闘争のなかなかなかから力づよいプロレタリア組織が**つぎつぎに**生まれ、たくましく成長することを、はっきり証明している。」47P・・・ローザの運動の意義の強調

II

「この問題で（労働組合と党の関係で）、労働組合に直接役立つためといって、われわれが不和をわれわれの隊列にもちこむのは、無責任ではないだろうか。」50P

「党の幹部会が提案しているように、無政府主義的社会主義者を党からだちに排除するというのなら、われわれが左のほうの限界線をひくことには断乎としてエネルギーを傾けながら、右のほうにいつでもひろく門をあけている、といった悲しむべき例をつくることになってしまう、・・・・・・」50-1P

「アナーキズムは、われわれの戦列における右傾化への反動としての極左なのだ。（「そのとおり！」）アナーキズムの克服にさいしては、意見の相異によって何人も党から排除されない、というあの昔からの組織原則を忠実にまもっていただきたい。われわれは、日和見主義者と正面から対決することによってのみ、これらの人びとの力をそぎ、アナーキズムの運動全体をほり崩すべきだと思う。なぜなら日和見主義者こそ、すべてのアナーキーなはねあがりの温床なのだ。極端な右よりの偏向者をだれも除名しなかったのなら、われわれには極左を排除する権利はない。（さかんな拍手、異議の声）」51P・・・ローザが「極左的」アナーキズムの登場を日和見主義との関係でとらえていること

労働組合政策の二つの方式

ドイツの比較的待遇の良かった印刷労働者組合（イギリス的体制内化）とロシアの印刷労働者組合の比較、闘いのなかでの一挙の闘う労働者組合化

「革命にしる、革命的闘争にしる、もちろんどんな「善意」をもってしても、人為的に他

国に移植できるものではない。しかし、すくなくとも卑屈な追従が唯一の救いの道であるというようなくだらぬ信仰は、隣国の革命の範例と教訓にぶつかって、**根底からゆさぶられたほうがよい。**」 57P

メーデー

メーデーを巡る位置づけと変遷。

「メーデーは、国際的なプロレタリア階級闘争の、生きた歴史の一断面である。したがって、そこには、ほぼ二〇年来の階級闘争のあらゆる局面、あらゆる要素が、正確に反映されている。」「メーデーは、プロレタリアの闘いの脈絡を伝えているのだ。メーデーは労働運動とともに生き、したがって労働とともに変化する。メーデーの思想、その気風、その緊張は、階級闘争の諸状況とともに、うつりかわりを示している。」 58P

メーデーの歴史 58-61P

「おそかれはやかれ避けることのできないこの時期に備えて成長をとげること、みずからの役割と力との自覚をもってこの時期に応ずる準備をととのえること、これこそ現在のプロレタリアートの課題である。大衆の直接的示威としてのメーデーは、そのための一手段にはほかならない。」「それと同時に、メーデーのもうひとつの要素が新しい力をおびて前面に現れてくる——すなわち、労働者の問題の国際性である。」 60P 「しかも今日、万国の労働者の先頭に立っているのは**ロシアのプロレタリアート**、革命の国のプロレタリアートである。ロシア・プロレタリアートの革命闘争、そのさまざまな経験や、かれらが提起した問題は、将来の戦闘にそなえるわれわれにとっても、すぐれた歴史の手引なのである。」 61P

「こうして、今年の五月一日は、新たな突風を巻きおこしながら近づいてきた。最初の時期のように、ふたたび、ブルジョアジーは憎悪と恐怖をもってこれをむかえ、労働者大衆はだんこたる闘志をいだいてこれをむかえる。八時間労働制と世界平和のためのプロレタリアのデモンストレーションとして出発するメーデー、それはやがてプロレタリア革命のためのデモンストレーションとなってゆくだろう。メーデーがこれから向かう道は、下降ではなくて、予想もつかぬような飛躍発展なのだ。この飛躍と発展の担い手は、すでにブルジョア社会の表層を吹きたてている暴風である。この暴風は、われわれをもっとも熾烈な闘いへ、そしてまた決定的な勝利へと導くであろう。」 61P

ドイツ社会民主党ロンドン大会での演説／Ⅰ 挨拶／Ⅱ 一九〇七年五月二五日の演説／Ⅲ むすびの言葉 ◎

Ⅰ

ロシア革命の評価とロシア社会民主党の統一のための提起

「大衆的ストライキに関するイエーナ党大会の決議は、われわれの党（ドイツ社会民主党）がロシア・プロレタリアートの闘争から引き出した最初の重要な結論であった。……一九〇五年までは、ドイツ社会民主党内では、大衆ストライキに関して絶対否認の態度が支配的であった。党は、大衆ストライキを、純然たるアナーキストのスローガンであり、したがって、反動的で有害で空想である、とみなしていた。しかし、ドイツのプロレタリアートは、ロシアの労働者の大衆ストライキが、ひとつの新しい闘争形態であることを見ぬきはじめた。大衆ストライキは、政治闘争に対立するものではなく、政治闘争におけるひとつの武器として運用されるべきものであり、また、一挙に社会主義体制への移行をな

しとげる奇跡的手段ではなく、現代の階級国家において、最も基本的ないくつかの自由を獲得するための、階級闘争の一手段として運用されねばならないものである。」 62-3P

「ドイツのプロレタリアートが従来の闘争形態に新しくつけくわえた戦術スローガンは、もはや議会活動をあてにせず、広範なプロレタリア大衆自身の直接の行動をめざすものである。」 63-4P

一九〇五年以降の歴史 64-5P

「ブルジョア自由主義と民主主義は、革命的プロレタリアートに対抗する闘争において、決定的最終的に、反動の側に味方するものとなった。」 65P

「プロレタリアートは、ブルジョア国家の民主的な諸形式を擁護して闘う唯一の戦士たることを避けることはできないのである。」 66P

「ロシア革命の利害は自分たち自身の問題なのだという意識なのである。ドイツのプロレタリアートがロシアのプロレタリアートに期待するもっとも重要な点は、プロレタリア戦術の拡大と多様化であり、階級闘争の諸原理を全く新しい歴史的状況下に適用することなのである。」 68P

一八四八年革命のマルクス 68-70P・・・ブルジョアジーを追い込むブルジョア革命

「現在のロシアにおいて、あなたがたがマルクスと同じ地点から出発してはならないことは明白である。あなたがたの出発点は、一八四九年にマルクスの政策が到達した地点、つまり、プロレタリアートの明瞭な刻印をおびた自主的な階級闘争の立場である。今日ロシアのプロレタリアートは、一八四八年のドイツのような萌芽状態ではなく、ひとつに団結した。めざめた政治勢力である。ロシアのプロレタリアートは、今日の戦闘において、自分たちを孤立した一軍隊と考えてはならない。それは全世界のプロレタリアートをつなぐ国際軍の一部隊なのである。ロシアのプロレタリアートは、自分たちの現在の革命闘争が孤立した局地戦ではなくて、国際規模における階級闘争の全過程のなかでの一大戦であることを、忘れてはならない。」 70-1P・・・ローザのインターナショナリズム

「あなたがたはインターナショナルなプロレタリアートに対して重大な責任を負っているのだ。ロシアのプロレタリアートがその使命の偉大さにふさわしい党であることを示しうするためには、その闘争形態、確固たる態度、目的の明瞭な意識、戦術の幅、などにおいて、全般的な国際情勢の進展を見きわめ、資本主義社会全体が到達している成熟の度合を熟慮することが不可欠であろう。」 71P

「ロシア革命は、一九世紀における一連のブルジョワ革命のなかでの最終行動ではなく、むしろ、新たな系列をつくるべき未来のプロレタリア革命の先触れであり、これらの革命指導することは、自覚したプロレタリアートと、その前衛である社会民主党の歴史的役割であることを示させばならぬ。」 71P

「ロシア社会民主党がこれらの役割を成功裡になしとげるために、欠くことができないひとつの条件がある。それは党の統一という条件である。」 72P

II

ロシア社会民主党の左右他への批判

「史的唯物論に特徴的な弁証法的思考は、さまざまな現象を、固定したものとしてではなく、運動の状態において考察することを求めている。五八年前にマルクスとエンゲルスに

よって示された、ブルジョアジーの役割の特徴を引き合いに出して、これをいまの現実に適用するのは、形而上学的な思考のいちじるしい例であり、歴史を生き続けている「宣言」の言葉を、硬直したドグマに変えてしまうものと言わねばならない。」74P・・・*教条主義に陥らないローザの思想*

「ついに、翌年一月九日、ペテスブルクのプロレタリアートが街頭に出た。そして、この革命で、真の前衛であり、「教師」の使命をおびた者は誰であるかを示した。ブルジョア自由主義の死骸のかわりに、力強い生きた人間が登場したのである。」75P

「自由主義がはっきり肝に銘じなければならなかったのは、ロシアのプロレタリアートは彼らの手先で操ることのできる人形ではないということである。プロレタリアートは、いつもブルジョアジーの身代わりとしてその弾よけになってくれるわけのものではなく、かえってひとつの勢力として、この革命では自分自身の道を進み、行動にさいしては、自由主義者たちの運動とは独立に、自分自身の運動の法則と論理にしたがうものだ、ということである。」76P・・・*力をなくして右往左往するブルジョア自由主義*

「権力をめざす革命的な自由主義は、現実のロシアには存在しない。ひとびとはわれわれにむかって、この存在しない自由主義に適應するプロレタリアートの戦術をたてよと言い、そのためにプロレタリアートの要求を制限しようとしている。これはまったく空想の産物であり、思いすごしであり、幻影である。(拍手)そして形骸化した図式と幻想的な情勢の上に築かれたこの政策、現在の革命におけるプロレタリアートの特殊な課題を考慮しないこの政策が、「革命的リアリズム」と自称しているのである。」77P

「場あたりの」の羅列——パリ・コミューンの蜂起 77-8P、「あの有名な六月のフランスのプロレタリアートの蜂起」78P、「フランス大革命におけるプロレタリアートの公然たる行動」78P、「独立した階級としてのプロレタリアートの歴史的な誕生」78P、「さらに、ロシア革命の発展の歴史そのものが、プロレタリアートにとって、こうした「場あたり」を避けることが、問題の性質上いかに不可能なことであるかを、示してはいないだろうか？」78P・・・*「場あたりの」ということの中における自然発生性への依拠*

食いつぶしと引き離しというなかでの革命の進行「プロレタリアートはブルジョアジーを喰いつぶして成長し、ブルジョアジーから徐々に自己を解放しながら、かれらをほうむる最後の勝利へと近づいてゆくのだ。とくに、現在のロシアにおいてプロレタリアートがこの戦術を変えることは、だんじてできないのである。」78-9P

「ロシア社会民主党は、現在の状況をいささかも過小評価してはならない。現在の階級闘争が、どんな議会政治よりも、はるかにすばらしい教育的意味をもっていることを理解するには、党の最近の歴史をふりかえってみさえすればよい。一九〇五年までの、あの一月九日までのロシア社会民主党と、今日の党とのそれぞれの実態を思いおこしてみさえすればよい。一九〇五年一月以降半年間の革命運動と革命的ストライキ運動は、党をひと握りの革命家の集まりというひ弱な一セクトから大衆政党に変えた。党の数々の労苦は、階級闘争の「口実」を見つけ出す困難さのためでなく、反対に、巨大な階級闘争によって切り開かれた途方もない活動分野を掌握し、これを徹底的に利用することの困難さのために注がれている。」81-2P

「もちろん、真のマルクス主義は、議会政治の一面的な過重評価から遠く隔たっていると

同様に、革命の機械的な把握や、いわゆる武装蜂起の過重な評価かからも遠く隔たっている。この点では、ポーランドの同志たちやわたしたちじしんは、ボリシェヴィキの同志たちと意見を異にしている。」82P「われわれは広範な人民大衆を非合法に武装させるという計画も、また、いわゆる武装蜂起にそなえて、そのための組織をあらかじめこしらえておくという計画も、ともにユートピア的な冒険であると考えて。社会民主党の任務は、専制に対する大衆闘争の技術的準備ではなく、その政治的な準備である。もちろん政治的啓蒙は、もっと広範なプロレタリア大衆にむかってなされねばならない。武装した反動勢力と大衆の直接の衝突が、つまり全般的な人民蜂起だけが、革命闘争に決着をつけるのである。そのときはじめて、プロレタリア大衆の勝利が保証される。」82-3P「社会民主党は、革命についての機械的な見方、すなわち党が爆発的な革命行動を「つくり出し」て、これを決戦と「名づける」のだと考えるような見方を、もちろん警戒しなければならないが、しかしそれ以上に、党は、力をつくし、決意をあらたにして、党の戦術の広大な政治路線をプロレタリアートに明示しなければならない。」83P・・・ロシア十月革命を経て、そしてソ連邦の崩壊のなかでの再度のとらえ返し

戦術における動揺と無定見 84P

「マルクス主義は二つの本質的な要素を含んでいる。それは、分析ないし批判という要素と、革命の動因となる、労働者階級の行動的意志という要素である。だから分析ないし批判を行為にうつしかえただけでは、マルクス主義ではなく、それはこの学説のみじめな、片ちんば（ママ、自らの当事者性の「障害」問題さえ押さえていないローザの限界）のパロティにすぎない。」84P・・・実践の理論としてのマルクスの思想

「われわれにそれが可能なのは、プロレタリアートの自主的な革命的階級政策という原理がドイツでは確固不拔のものになっており、党の圧倒的大多数がそれを支持しているために、われわれの陣営におけるひと握りの日和見主義者たちの存在も、かれらの策動も、全く無害だからである。いや、それどころか、討論の自由と意見の多様性とは、運動を大規模にひろげるためには、必要でさえあるのだ。」85P

「この政策の、特殊な、ボリシェヴィキ的形態においてではなく、ポーランド社会民主党が把握し遂行しているような形態、ドイツ社会民主党の精神にもっとも近いあの形態において、すなわち、真のマルクス主義の精神で。」86P・・・ドイツ社民党では議論が成立しているところからのとらえ返し

III

ローザへの批判への応答、とりわけ農民や小ブルの位置付け問題

「農民階級は反動的な小市民的な階層であるという定義を、革命期における農民階級の役割についても、機械的に転用することは、うたがいもなく史的弁証法に対する罪悪である。」

90P

「明らかに、目下のロシアにおいては、農民階級の混沌とした運動を政治的に指導し、これを自己の影響下におくことは、自覚したプロレタリアートにとって当然の歴史的課題である。」91P

「プロレタリアートはあらゆる無産者のために闘う戦士となるべき使命をもつ、と語ったマルクスの言葉を思いおこそう。」91-2P

「階級闘争の革命的高揚にともなうプロレタリアートの敗北は、世界を蔽いつくすプロレタリアートの前進運動という総体から見れば、たんにその局所的な、一時的な現象形態にすぎず、最終的に社会主義の勝利にゆきつくためには、これらの敗北が避けがたい歴史的段階であることを、ロシアのプロレタリアートは決して忘れないだろう。」94P・・・敗北の中でつかみ取る運動の前進

社会主義インターナショナル・シュトゥットガルト大会での演説／I ミリタリズムと国際紛争との問題にかんする委員会での演説

大衆ストライキの意義と戦争テーゼ

「革命をうらぎろうというのでないかぎり、まなぶのおこたるべきではあるまい。前回のアムステルダム大会（一九〇四）で大衆ストライキの問題が論じられ、大衆ストライキを実現するにはわれわれはまだ未熟で準備不足である、と述べた決議が採択されたが、そのときアードラーが、自信たっぷりに依拠した唯物弁証法が、われわれが不可能と述べたことを、たちまちに実現したのである。わたしはフォルマルに、遺憾ながらベーベルにも、反対せねばならない。われわれの現状からすればこれまで以上のことはなしえない、とかれらは言うけれども、しかし、ロシア革命はどうだったのか。それはたんに戦争を契機として起こっただけではない、戦争を終熄させるのにもあずかってちからがあったのだ。」

95-6P

「わたしはマルクス主義者であり、だからこそマルクス主義的見解が硬化した宿命論的な型にはめこまれることを、大きい危険とみなす。」96P・・・まさにスターリンが陥った道

「戦争が起こったばあい、われわれのアジテーションが戦争を終熄させる方向に向けられることのみならず、戦争を利用し、戦争を階級支配一般の崩壊を促進する景気に転化する方向に向けられることをも、のぞむものである。」97P

SDP ニュールンベルク大会での演説／I 党学校にかんする討議のなかでの演説／II メーデーにかんする討議のなかでの演説／III 予算案承認にかんする討議のなかでの演説

I

「学校のなかで、党员学生たちとの不断の接触のなかで、しだいにわたしは、このあたらしい施設をたかく評価するようになった。いまは確信をもって言い切ることができる、われわれはあたらしいなにものかを創造した、その効果の全体は展望しくせないが、それは党に利益をもたらすはずのものだ。」98P

「授業プランの筆頭には国際社会主義の歴史がおかれてしかるべきだろう。」99P

「かれらには（アイスナーやマウレンプレッヒャーのような連中）大衆がまるきりわかっていない。プロレタリアートは日常の生活からすでに材料を知っている。「材料」ならアイスナーよりずっとよく知っているのだ。（つよい賛同の声）大衆が必要とするものは、全般にわたる啓蒙であり、理論である。理論こそが材料を体系化して、それを敵の死命を制する武器にきたえあげる可能性を、われわれにあたえる。（つよい賛同の声）党学校の必要性、つまり社会主義理論の理解をわれわれの戦列のなかにひろげてゆくことの必要性を、わたしに確信させたものがあるとすれば、それはほかでもなく、アイスナーの批判である。」101P

II

「これまでのドイツの、またあらゆる国のメーデーの経験の示すところによれば、犠牲者

の出るのを予防する道は、ただひとつしかない。それは救援態勢の整備という道ではない。メーデーのできるかぎりの拡大という道である。参加者の数がおよそ処分を不可能にするほどに莫大となるときにのみ、つまり、階級意識をもち組織をもってたたかう労働者階級の現実の力量が、その全力をあげて資本家階級と対決するときのみ、そのときに資本家階級は、われわれにたいして処分をふりかざすこともできなくなるのだ。」「だからわれわれは参加者の救援方法という問題のみをことこまかにあげつらうことによっては、正しい道を見いだしえない。」 103P

「唯一の解決は、あれこれと救援を規約化してみることとはきっぱり手を切って、メーデーの思想を強力にプロパガンダしてゆくことである。」 104P

III

「以前からわれわれは、ほとんど毎回の党大会で、原則上のまた戦術上の根本問題について活発な論争をかわしてきた。……毎年のようにくりかえしている。……わたしの考えでは、党がもし修正主義に譲歩するならばひっきょうどんな羽目になるかを今回の討議ほどにするどくはっきりと、まざまざとかびあがらせた討議は、これまでに例がなかった。」「南ドイツに代表される修正主義的傾向の線を辿ってゆけば、さきゆきわれわれは、ブルジョア的改良政党かフナーキズムか、という二者択一のまえに立たされてしまう、ということである。」 105P

「わたしの考えでは、もしわれわれがこれまで主としてちっぽけなポジティブな成果ないしけちな社会会利用によって、支持者たるプロレタリア大衆をあがないとったかのように、事態を想像するとすれば、その想像には、ドイツ・プロレタリア大衆にたいする論外の不当な中傷がふくまれているのみならず、われわれの社会主義の最終目標の魅力にたいする法外な蔑視がふくまれている。」 108P

「今後のドイツにおいては、ますます先鋭化していく政治的対立の不可避の結果として、社会改良のポジティブな成果はますます僅少となり、ついには不可能となるだろう。」 108P

「もし団結が、民主的な党の絶対多数が多数意見をまとめて全党員を拘束する規約をつくるという基本的な権利を抛棄することによって、あがなわれるものとしたら、そんな団結はまやかしである。かれらの行動に妥協することはゆるされない。党内の団結をまもらなければならぬ。われわれの政治的ならびに組織的な破滅をもたらす修正主義的傾向にたいしては、いまこそつよく呼びかけねばならない、もういいかげんにしたまえ、と。」 109P

つぎはなにを ○

I

デモについて

「プロイセンの選挙法の改革は、議会的な手段によって解決されうる問題ではなく、議会外の直接的な大衆行動によってのみなんらかの変革がもたらされうる問題である——という認識が、一方に数次にわたるはじめての街頭デモを経験し、他方にプロイセン州議会の選挙法委員会でのいくつかの場面を見てきたいまは、生き生きとしたかたちで確立している。」 110P

「われわれの党は、すでに開始されている大衆運動を眼のまえにして、党によって点火されたこの大衆行動を今後どのように指導し前進させてゆくか、明確なプランをもたねばな

らぬ。」 110-1P

「デモというものが有効な圧力となりうるのは、必要ならば先鋭な闘争手段にうったえるぞという真剣な決意と用意とが、デモの背後にひかえているばあいに限られる。だから、街頭デモがその直接の目的を十分に達成しえないことがあきらかないまでは、何よりも必要なのは、以後の行動の明確なプランである。」 111P

「この最初の経験は、大衆示威にはそれ自体の論理と心理があること、そしてそのことを計算に加えることが示威を指導しようとする政治家にとっては焦眉の急務であることを、われわれの党に指示し警告しているものといえよう。つまり、政治闘争における大衆の意志の表現は、機械的にいつまでも同一の水準に維持しておけるものではないし、いつまでも同一の形態にはめこんでおけるものでもものでもない。それは高揚し、先鋭化し、あらたな、より有効な形態をとってゆくのでなければならぬ。ひとたび点火された大衆行動は、推進されねばならないのだ。指導的な党が、あたえられた瞬間において、必要なスローガンを大衆に手渡す決意に欠けるならば、大衆が一種の幻滅にとらわれることは避けがたい。そうなれば高揚は消え、行動は挫折する。」 111-2P

「ベルギー、オーストリア＝ハンガリア、ロシアにおける類似した闘争例も、おなじ経験をうらがきする。これらの例のばあいもそれぞれ、大衆行動のなにもものにも阻まれぬ高揚と前進が見られ、高揚によってはじめて、行動が政治的效果をもちえたのであった。／さらにもうひとつの事情が、適切な明瞭な警告としてやくだつ。つまり街頭デモ一本槍は、社会民主主義者のとるべき手段としては、事態の進展に追いつけないものとなる、という事情である。」 114P

II

大衆ストライキについて

「原則上の問題としてはすでに、五年まえイェーナでの党大会の正式決議によって、われわれの党は、政治的大衆ストライキはドイツでも適用しうる闘争手段のひとつである、と述べている。」 115P

「しかし、現在の大衆運動の過程で大衆ストライキを実施することを可とするものは、とくに大衆ストがいま進行中で拡大中の大衆行動からほとんどおのずからに帰結される、自然な、不可避的な発展段階の行動である、という事情である。……しかし、数ヶ月にわたって拡大に拡大をつづけてきた労働者大衆の壮大な示威運動のなかから生まれてくる大衆ストは、そして同時に、いかなる犠牲をはらっても前進するかそれとも継続中の大衆行動をむなしく挫折させるかというジレンマに、三百万人の党が直面させられている状況から生まれてくる大衆ストは、すなわち、めざめた大衆の内的欲求と決断とから、同時に政治状況の激化から生まれてくる大衆ストは、生まれてくる資格を十分にそなえており、また確実な効力をそなえている。」 116P

「大衆ストは、それ自身の内的発展・論理・段階・帰結をもっている大衆行動そのものの外的な形態にすぎないのであって、政治状況およびその推移に密接な関連をもっている。大衆スト、ことに短期の一回かぎりの示威ストライキとしての大衆ストは、たしかに、いま進行している政治的大衆行動の最後のことばではない。しかしそれが 現段階における最初のことばであることは、まったく確実である。……それでもなお、数百万を指

導する党の責任者として、党によって点火された闘争をそれのみがさらに前進させるようなスローガンを、だんこととして出してゆく、党に課せられている状況が、現に存在するのだ。」 116P

「言うまでもなく、大衆ストのような性格と規模をもつ行動は、組合ぬきで党だけで実現することはありえない。ふたつの組織が協力し団結しておこなう働きかけがなくては、全国的な強大な行動ははじまらないし、行動は強大でなくてはもともとはなしにはならぬ。」

117P

「プロレタリアートの大きな大衆運動では、つねに無数の政治的要因と経済的要因とが、結びつきあって作用している。まずふたつの要因を人為的に切りはなし、杓子定規に區別しておこうなどとするのは、むだであり有害であろう。」 118P

「現実にはわれわれの組合組織がおかすと見える危険ないし冒険は、ただそう見えるだけだからである。現実には、健全な強力な組織は、先鋭な闘争のなかでのみ確立されるものであり、試練のたびごとにあらたな生命力を生みだして、生長してゆくものだ。」 119P

「大衆の直接行動の決定は、大衆自身によってのみなされるものなのだ。労働者階級の解放は労働者階級自体の仕事でしかありえない——という「共産党宣言」のなかのことは、小さな、個々のばあいにも、指標としての意味をもつ。プロレタリアートの階級党の内部においても、重大な決定的な運動はすべて、ひとにぎりの指導者のイニシャチヴにではなく、党員大衆の確信と決意とに、もとづくものでなければならない。」 121P

「あらゆる都市あらゆる地域において、党および組合の同志たちは、現在の状況下の諸問題にたいする態度をきめ、そして組織労働者大衆の意見が全体として聞かれるようにするために、かれらの意見ないし意志を、明確に率直に言いあらわさなくてはならぬ。そしてそれがなされるならば、われわれの指導者たちも、もちろん勇気をふるいおこすだろう。これまでつねにふるいおこしてきたように。」 121-2P・・・民衆に領導される「指導者」

種まきの時期 ○

「こうして敵が、われわれのために千べんも土壌を鋤きかえしてくれた。ゲスラーのような人々もめざめさせ、無関心な人々をも怒らせ、怠惰な人々も反省させた。いまこの土壌に、ふんだんに啓蒙の種子をまくことが、われわれの任務である。」 123P

「あらゆる成人の、性別にかかわらない、普通・平等・直接選挙権が、まず第一の目標である。」 124P

「すなわち、強力な打撃こそ最良の防禦、にしたがってわれわれは、ますますあつかましくなっている支配者反動の挑発にたいして答えるために、アジテーションの銚先を転じて、全戦線にわたって、激しい攻撃に移らねばならない。攻撃がもっとも明瞭な具体的ななかたちで、簡潔で有勁なかたちで展開されるには、われわれの政治プログラムの第一段をなす要求、すなわち共和制の要求を、はっきりとアジテートしてゆくことが第一だろう。」

124-5P

「闘争は、反ミリタリズムや反君主制やそのほかもろもろのプチブルジョア的「イズム」に分散することなく、一貫して反資本主義として生長した。それは、ときに共和制ときに君主制のかくれみのをまとう現体制にたいする、あらゆる奇型ないし形式をとってあらわれる現体制にたいする、不倶戴天の敵であった。ドイツではこんにち、最良のブルジョア

共和制といえども現在の君主制におとらぬ階級国家にほかならず、資本主義的搾取をまもる堡壘にほかならぬという確信が、したがってプロレタリアートの状態を本質的に変革しうるものは賃銀方式の廃止のみであり、言い換えればあらゆる形態における階級支配の廃止のみであって、ブルジョア共和制もとの外形ばかりの「民主政治」ではないという確信が、啓蒙されたプロレタリアの確乎たる財産となっている。このことは四〇年間にわたる徹底的な啓蒙活動の成果であった。」 125P

「ドイツのブルジョア自由主義のおそろべき頽廃は、さまざまなかたちで見られるが、君主制への追従という点に、とくに露骨にあらわれているからだ。この点において自由主義ブルジョアは、保守的なユンカー層さえ、いわば鼻ひとつかふたつの差だけおさえて、前に出ている。」「しかし共和制のスローガンの効用は、それだけではない。ドイツの国内政策・対外政策の最近のありかたから見れば、支配的反動の焦点は、ないし少くとも外から見えるかぎりでの尖端は、あきらかに君主制である。個人支配をおこなう半絶対君主制が、うたがいもなく四半世紀以来、そして現在ますます、ミリタリズムの支点となり建艦政策の動力となり、世界政策上の冒険の指導精神となっているし、同時にそれが、プロイセンのユンカー層のとりでとなり、ドイツ全域のなかでのプロイセンの政治的後進性の優位を維持する堡壘となっている。」「このスローガンは、ドイツのミリタリズム・植民地政策・世界政策・ユンカーの優位・プロイセン化にたいする、事実上の挑戦状なのだ。」 126P

「不満をもつ人々、搾取になやみ圧政にくるしんでいる人々の尙大なむれば、われわれの集会に、テクノロジーにくわわろうと駆けつけてきているが、かれらにむかってわれわれの語りかけることばは、たんにプロイセン＝ドイツの支配的反動にたいする痛烈な批判で終ってはならない。さらに社会主義の福音が、あたらしい社会主義社会の諸原理が、語られねばならぬ。」 127P

「もしもわれわれが、現在の激烈な格闘の時期を、大衆をゆさぶりおこして立ちあがらせることにのみならず大衆を啓蒙することに、また味方の兵力を大きく拡大することのみならず大衆の社会主義的な意識を強化し深化することに、十分に利用することができるならば、プロレタリアートの事業は、この大衆運動から、勝利者としての歩をすすめてゆくことになるだろう。われわれは、すでに耕されている土壌のなかに、ふんだんに社会主義の種をまきつけよう。収穫はとおからずわれわれのものとなるのだ——どんなことがあろうとも。」 127P

SDPマクデブルク大会での演説／I バーデン州予算承認にかんする討議のなかで／II 選挙権問題にかんする討議のなかでの第百号議案提案理由の説明

I

議会主義者たちの妥協に対する批判

II

大衆デモと大衆的ストライキについて

「われわれが、戦闘的な大衆を選挙闘争に動員し、力づよいデモンストレーションを組織するやいなや、たちまち大衆じしんのなかから、つぎの問いがうまれたのである——「つぎはどうするのだ?」……」 135P

「プロイセン選挙権闘争をすすめるにあたっては、あらゆる不測の事態に備えなくてはな

らない。「(「そうだ、そうだ!」) われわれは、街頭デモストレーションへ動員した大衆にたいして、さいしょに、明確な、動揺することのない保障を与えなくてはならない——「きみたちは無防備のまま、サーベルをがちゃつかせる野蛮や反動の挑発のまえにほうり出されるのではない。緊迫した情勢のもとでは、挑発にたいして直ちに反撃する手段を、われわれはもっているのだ。その手段とは、ふたたび労働忌避である、政治的大衆ストライキである」 136P

「大衆ストライキの問題について討論すれば、たちまち人為的に大衆ストライキをひきおこすことになるなどという妄想を根絶すること、これまたわれわれの提案の重要な任務である。」 137P

「政治的、経済的情勢の成熟から、大衆ストライキはおこるのである。大衆ストライキを実現するための条件がなければ、いくら大衆ストライキについてかぎりなくおしゃべりをつづけたところで、なにもおこりしはしない。」 137P

「サンジカリストたちがたえずゼネラル・ストライキをとこなえている国フランスは、実際にはもっともまれにしかゼネラル・ストライキがおこらない国なのである。」 137P

「これらの点を総合すれば、あなたがたも、わたしたちがいま言ったような大衆ストライキの宣伝は、大衆を社会主義へと教育するための絶好の教材であることをみとめるにちがいない。」 139P

「したがって、大衆に、自己の任務にたいする自覚をうながし、ひとたび情勢が成熟したならば、大衆が、ただ感情的に、怒りをこめて大衆ストライキに参加するだけでなく、政治的に訓練された階級闘争の戦士として、社会民主党の指導のもとに、大衆ストライキの武器を行使するよう、いまから備えておくことは、うたがいもなくわれわれの義務である。」

139P

政治的大衆ストライキと労働組合／ハーゲンにおける自由労働組合連合の総会での演説

◎

「現在の時点では、ドイツの労働組合の集会のテーマとして、大衆ストライキと労働組合、というテーマ以上にアクチュアルなテーマはありえない。」 142P

「このたたかいは妻ぐるみ家族ぐるみの、おそらく一〇〇万におよぶ人々の戦いであり、最強の労働組合と思いがった強大資本とのあいだの、生死をかけたたたかひである。」 143P・・・「妻ぐるみ家族ぐるみ」という表現は、ローザが男並みに闘う女性という状況になっているところで、男たちに訴えている性差別的な当時の情況

「現代のプロレタリア階級のたたかひは、本に書かれたような、学説のていさいをととのえた、できあがった図式のとおりには、はこばれるものではない。現代の労働者のたたかひは歴史のひとつまであり、社会発展のひとつまであって、われわれはうごく歴史のなかで、発展のなかで、闘争の方法をまなびとってゆくのだ。・・・・・・莫大なはたらく人民大衆事態が戦闘に立って、じぶん自身の意識から、じぶん自身の確信から、またじぶん自身の理解から、じぶん自身の解放のための武器をきたえあげてゆくのである。」 143-4

「われわれのような政治的戦闘者第一にまもるべきことは、時代の発展に一歩たりともおくれぬこと、現代世界の変化を、また、われわれの闘争戦略の変化を、つねにはっきりと究明しておくのをおこたらぬこと、である。」 144P

ストライキの歴史 144-6P

アナーキズム批判 146-8P

「紋切型のアナーキズムがロシア革命のなかでどのようなかたちで現れたかという、そのかたちはただひとつであって、ルンペンプロレタリアートの、こそどろやならずものやごろつきの、かつぎまわる看板だったのである。」147P・・・マルクスのルンペンプロレタリアート規定の流れ、犯罪者差別など、現代的に底辺労働者やホームレスの人たちに対する位置づけのし直し

「アナーキストにとっては、大衆ストライキのイデーは、政治闘争のための政治行動とは、まったく正反対のものだったしかし、現在、われわれはかれらとは逆に、大衆ストライキを政治的武器とみなしている。これは人民が政治的な諸権利を獲得してゆこうとするばあいに、もっともよく役にたつ武器なのだ。」148P

「これまでの大衆運動がわれわれに教えているのは、前進の一步一步は、街道に進出した強力な労働者大衆の圧力によってかちとってゆくほかない、という事実である。」150P

「支配者どもは、三月六日にはベルリンでやったように、かれらの大砲を、実弾をこめたかれらの小銃を、大衆につきつけたければつきつけてみるがよい。われわれが用意している武器にたちむかうには、大砲もきれあじのいいサーベルも、ものの役にたちはしない。」

150P

「だから、政治的大衆ストライキという平和で平穏な武器こそが、もっとも鋭利な武器である。反動的な支配階級があいかわらず気ちがい（ママ）じみたぎまん策をとりつづけるかぎり、われわれがこの武器をとって立ちこは、おそらく必然だろう。われわれは、こんにちの政治的發展のなかでは、基本的な政治的諸権利を獲得するために、ますます大衆ストライキの武器にうったえざるをえない。だからこそ、労働組合運動の政策は、まさにこの方向におしすすめられているのだ。」151P

「いうまでもなく、いまわれわれにむかって意識的、計画的にとてつもない力だめしをいどんでいるのは、資本家たちである。」151P

「こうして資本家や経営者自身が、連合した暴力装置の擁護のもとでロックアウトをかけた、思いのままに大衆ストライキを労働者におしつけることができるのであれば、われわれの組合組織としては、団結権をまもるための闘争がやがて不可能となることを予想して、大衆ストライキの武器の使用を考慮しておくことは、あきらかに緊急の必要である。だからいま、いちばん実践的課題とは、未来のイメージをはっきりつかまえることだ。たしかに、プロレタリア大衆が状況の全体を明確に把握し、かれらの直面している偉大な課題を自覚することによって、大闘争をたたかいぬくだけの用意をととのえればととのえるほど、この闘争に勝利するチャンスが、それだけ多くなるのである。」151-2P

大衆ストライキを実施することへの日和見主義者の反対意見の内容。①「大衆スト、とくに政治的ストライキをおこなうばあい、われわれはたいへんな冒険をおかすことになる。われわれの労働組合組織はそのために大きな危険にさらされるだろう。激突の結果、われわれの組織はばらばらにくずれてしまうかもしれない。」152P②「われわれはなにかまでありながら敵側に組織されている大衆をどうするか、このたいへんな問題をまず解決しておかねばならない。」154P③「われわれは労働組合組織のちからの主因をなすものを、すなわち

われわれの金庫を、資金を、試験台にのせることになるわけだが、どんな組合にしる、巨大な大衆運動ないし巨大な大衆ストに直面したときに、われわれの組合には十分な資金があるから、幾十万の人間が賃金カットされても、長期にわたってやしなってゆける、とすすんで断言できるような組合は、ひとつとしてない。」 155P

これへのローザの反論

①へのローザの反論

「情勢というものは、うごくものだ。たとえ諸条件はおもわしくないにしても、闘争にたちあがらなければ、組織化された労働運動の名誉さえまもれない」 152P

「われわれの組織は、たたかいのなかでしか存在しえず、たたかいのなかでのみ生長する。」 153-4P

「労働組合組織を強化し拡大するためには、大規模な大衆的な闘争の時期ほどによい時期はない」 153P

②へのローザの反論

「このような懸念を口にする人々は、まさにこの点で歴史の弁証法（？）かれらの主張とは正反対にはたく、ということ認識する必要がある。」 154P

「共同の行動にほんとうに意味をもたせるためには、われわれのほうが共同行動の門戸をひろくあけはなち、あけはなした門戸を政治的に活用して、いまなおブルジョア的指導者にひきまわされている大衆に、かれらほんらいの、本質的利害や任務についての理解を、あたえてゆかねばならないのだ。」 155P

③へのローザの反論

「われわれはたんに在庫金額の見地から、政治的大衆ストライキのような巨大な運動を考えることはできない。」「いま、われわれの目前にせまっているような大闘争は、金庫だけをたよりにしては、けっして勝ちぬけない。」「われわれの歴史を見ると、大衆の理想主義に期待して期待がうらぎられたことは、これまで一度もない。大衆は極度の苦難にも耐えぬいた。近代プロレタリアートの解放闘争の過程には、その実例（下線引用者）が無数にありはしないか。」 155P 「実例」 155-7P

「大衆の犠牲的精神を、理想主義をよびおこすためには、くだくだしいことを言う必要はない。現在おこなわれている闘争や、目前にせまっている大衆ストライキのすべてが、ほかでもなく、資本主義からの究極的な解放にいたる、社会主義的な社会体制にいたる、ひとつの必然的な歴史的段階なのだ、ということをくりかえし指摘しさえすればよいのだ。」 157P

「同志たち！ ロックアウトのひとつひとつが、前進の一步になる。資本主義体制の枢にまたしてもうちこまれる、一本の釘になるのだ。ロックアウトの方法が、プロレタリアートを負かせる方法でもないのに、流行していることこそ、現在の社会体制がもはや未来をうしない、あやうくゆらいでいること、別の社会体制に席をゆずらねばならぬことの、よい証拠である。そして、大衆ストライキのひとつひとつは、現体制の除去という方法での一步前進ではないか？ 同志たち、マルクス・エンゲルスの有名な「共産党宣言」の結語は、「プロレタリアートは鉄鎖のほかにはうしなうものをもたない、獲得するものは全世界である」と言っているわれわれがいま、まもなくはじまる大戦闘にそなえて武器をととの

えているとすれば、労働組合に組織されたプロレタリアのひとりひとりが、使命を自覚して社会民主党にむすびつくことが必要であり、また社会民主党员であるプロレタリアのひとりひとりが、当然ながら社会主義の啓蒙的文献をおのれの血肉とし、組織労働者賭して組合活動をすると同時に、社会主義的な解放のため、確乎とした目的意識をもってたたかうことが必要である。プロレタリアの最後のひとりまでが、われわれのうしなうものは鉄鎖だけであり、獲得するものは全世界であることを理解するときのみ、われわれはこのことばを旗じるしとして、これからのたたかいを、勝利にみちびくことができよう。」

157-8P・・・まさに革命戦争の論理

モロッコをめぐる

モロッコ問題で、国際主義ビューローが会議を呼びかけているのに、選挙に不利になるとして、応えようとしなかったドイツ社民党執行部に対するローザの批判。

「反動勢力がモロッコをえさにして利を占めようとしていることが予測されるのならば、われわれ自身がそのけちな背景や、そこで問題になるさもしい資本の利害を、できるだけはやく、できるだけ徹底的に人民大衆にむかってあきらかにしてゆくことこそ、かれらのスローガンの効力を無にし、かれらの計略をうちやぶるための、唯一の手段であるだろう。資本主義反動のあらたな攻勢に反撃するわれわれ自身の論究やアジテーションが、どうしてわれわれを敗北にみちびくおそれがあるのか、わけがわからない。」 163P

「一八七〇年にベーベルとリープクネヒトは、盲目（ママ）的な愛国主義の荒れ狂う（ママ）なかで平和と人民の友好によせるわれわれの信念を、臆せず公然と語った。」 163P

「あやまった態度の決定は、われわれのスローガンの強力さにたいする信頼がまったく欠けていることの結果であるが、同時に他面それは、資本の利害の影響力を平和の保証として過大評価していることの結果でもある。」 163-4P

「したがってわれわれの考えでは、世論をしずめるのではなくて、反対に世論をゆりうごかし、いまの世界のこうした冒険にひそんでいる危険を警告することが、社会民主党の責務である。」 164P

「国会選挙をわれわれは「すばらしい局面」のなかにむかえていると、喧しく言われている。同時に、この「局面」をなんらかの無謀な行動のために棒に振ってはならない、と忠告する声が、くりかえしきこえてくる。かつてはプロイセンの選挙法闘争が無謀だったが、いまはモロッコのごたごたに反対するアジテーションがそれにあたる、というわけらしい。われわれの考えによれば、「すばらしい局面」なるものは、無思慮な行動によってだいなしになりかねぬような、表面的偶発事態などではない。それは過去数十年にわたるドイツ内外の歴史的な展開の全体の結果である。だから、もしわれわれが、党活動の全体と階級闘争の課題のすべてとを、投票用紙というせまい視野のなかでだけ眺めはじめることさえなれば、われわれはこの有利な「局面」を棒に振ることはありえない。」 165P

モロッコ問題のパンフレット

前の論攷のモロッコ問題で社民党執行部が作った、パンフレットの批判

「戦争の挑発に反対して行動する決意が、はやくから、なんのためらいもなくなされていたら、そしてこのパンフレットがわずか一日か二日のやっつけ仕事でなかったら、おそらくもっと使いようのあるものができていたであろう。ところが数十万の大衆にばらまかれ

たこのパンフレットは、いまのかたちのままなら、むだ骨おりにちかい、と残念ながらいろいろざるをえない。」166P

「党のパンフレットは、世界政策の本質やそれと資本主義の関連について、われわれの見解のアルファでありオメガであるものについて、一言もふれていない。国際的な現象としての世界政策は、ぜんぜん問題にもされていないのだ。」「全体にわたっておそろしく浅薄であるためか、社会民主党による大問題の分析というよりは、むしろ社会民主党の床屋政談といった印象をあたえる。」「一般的世界政策が、個別的にはモロッコの紛争がドイツの**内的発展**、軍国主義、大海軍主義、財政・税務政策、社会政策面における停滞と反動、国内のあらゆる状況の不安定性などどのように関連しているかについて、少くともふれてみる必要があったと思われるが、しかしパンフレットのどこをさがしても、これにふれたことばは一言もみあたらない。」167P

「さらに党は、プロレタリアートの階級闘争の観点からではなく、むしろプロレタリアートと「有産階級の大衆」とのいわゆる利害の一致を旗じるしにして、資本主義的な世界政策や軍国主義とたたかう役目をもひきうけているのだ！」168P

「ここでは、植民地政策はだれにとっても**損のゆく事業**だ、というありきたりの図式しかつかわれていない。この図式によると、われわれは、植民地政策がもうからないから、ただそれに反対しているのであり、大衆に植民地政策を嫌悪させるためには、それがもはや実際にもうからないことを証明すればよい。こうした見解の反面として、世界政策にたいするブルジョアジーの利害関係が、直接の現金収入やその日その日のふところ勘定と同一視されている。」169-170P

「パンフレットは植民地の民族や土着民、かれらの権利や利害、世界政策によるかれらの苦悩について、一言ものべていないし、「イギリスのかがやかしい植民地政策」についてはなんども語るが、飢餓によるインド人の定期的な発疹チフス、オーストラリア原住民の絶滅、エジプト農民の背中をうちたたたく皮の鞭については、なにひとつ言及していない。パンフレットは、モロッコ問題に関するキダーレンの決定をまるで幼児のように待ちわびているドイツ人の恥ずべき状態について、一言ものべていないし、帝国議会のみじめな役割とその召集の必要性について、君主制の私的統治機構と世界政策におけるその役割について、そして最後に——社会主義とその目標について、一言ものべてはいない！」170P

「このようなパンフレットではわれわれの任務が正しく遂行されないことはたしかだし、また他方、もしわれわれが冷静に徹底的に考え、批判的に吟味しながら、けっしてあわてふためくことなく行動をおこしていたなら、はるかに有用な、よく考えのねれたパンフレットができていたであろうことも疑いない。」170P

大衆的ストライキ・党および労働組合 ◎

ローザの民衆運動の自然発生性を評価し依拠するというのが如実に表れている論攷
I エンゲルスの大衆ストライキに対する見解のローザの押さえとロシア革命がエンゲルスの見解を乗り越えたこと（覆したこと）

「大衆ストライキ問題にかんするこれまでの国際的社会主義の著作や意見は、この闘争手段が最大の規模でもちいられた最初の歴史的実験であるロシア革命以前のものが、ほとんどすべてである。したがって、大部分が時代おくれになっていることも明らかだ。これ

は一八七三年にフリードリヒ・エンゲルスがスペインにおけるバクーニン主義者の革命いじりを批判してつぎのように書いたのと本質的におなじ立場に立っている、と自認している。」 172P

エンゲルスの引用 172-3P

エンゲルスの文「じつは、ここにおとし穴がある。一方では、とくに大衆が政治にたいして控えめな態度をとっているばあい、政治はそれをかさにきて、労働者が組織や資金を強化することなど許さないだろう。また他方では、プロレタリアートが理想的な組織と巨額の闘争資金をまだととのえていなくても、政治上の事件や支配階級の横暴な干渉をきっかけに、労働者の解放が実現されてしまうかもしれない。しかし、かりにプロレタリアートに組織と資金ができたとすれば、目的を達するためには、もはやゼネラル・ストライキのような廻り道など必要ではない。」 173P

これを論拠としてインターナショナルな社会民主主義者がとってきた態度「この論拠は、労働者階級の日常的な政治闘争に反対して社会革命誘発のための手段としてのゼネラル・ストライキを提唱するアナキストの理論にたいして、真っ向から対決したものであるが、要するにつぎのような両刃論法でいづくされる——もし、全プロレタリアートにまだ強力な組織と資金がそなわっていないならば、ゼネラル・ストライキを実行することはできないし、他方、プロレタリアートがすでに十分に強力な組織をもっているのならば、ゼネラル・ストライキなど必要ではない、というのである。」 173P

このことへのローザの押さえ「この論拠は、たしかにしごく単純なものであり、四分の一世紀ものあいだ、アナキストの妄想に対抗する武器として、また広汎な労働者層へ政治闘争の観念を浸透させる有効な手段として、近代労働運動にめざましく貢献したのであった。あらゆる近代国家における最近二五年間の労働運動の偉大な発展は、バクーニン主義に反対してマルクスとエンゲルスが強調していた政治闘争の戦術の正しさをりっぱに証明している。そして、ドイツ社会民主党が今日の力量をそなえ、インターナショナルな労働運動のなかの前衛の立場をまもっているのも、じつはこの戦術の徹底的なきびしい適用から生まれてきた結果にほかならない。」 173-4P

それらを覆し乗りこえること「ところが、ロシア革命が以上の論拠に根本的な修正を加えるにいたるのである。ロシア革命は、階級闘争の歴史のなかで、はじめて大衆ストライキの観念や、さらには——後章で詳述するように——ゼネラル・ストライキの観念を現実にはなばなく実らせ、労働運動の発展に新紀元をひらいた。もちろん、このことは、マルクスやエンゲルスが提唱した政治闘争の戦術や、また、かれらがアナキズムに加えた批判がまちがっていた、ということにはならない。反対に、今日、ロシア革命のなかで階級闘争のまったくあたらしいモメントとあたらしい条件をつくり出したのは、マルクス・エンゲルスの戦術やドイツ社会民主党のこれまでの実践の基礎になっていたのと、まったく同じ思考過程であり、同じ方法である。ロシア革命、典型的な大衆ストライキの最初の歴史的な実地試験ともいえるこの革命は、アナキズムの名誉回復などにけっしてつながるものではない。それどころか逆に、**アナキズムの歴史的精算**を意味している。」 174P

「プロレタリアートがなんらの政治的権利をもたず、極度に劣弱な組織しかなかった国、いりみだれた混乱した利害をもつ多様な階層の雑多な錯綜、人民大衆の乏しい教育、さら

に支配体制側のきわめて残忍な暴力行使、これらすべての条件は、アナキズムが、おそらくは短命であるとしても、急激な勝利をおさめるのにうってつけと思われた。そのうえ、なんとといっても、ロシアはアナキズムの歴史的発祥地であった。しかしながら、事實は、パクーニンの祖国がかれの教理の墓地にならざるをえなかったのである。ロシアでは、アナキストは、大衆ストライキ運動の先頭に立たなかった。もちろん、いまも立っていない。」 175P

「アナキズムは、ロシア革命のなかでは、もはや戦闘的プロレタリアートの理論ではなく、反革命的ルンペン・プロレタリアートの看板イデオロギーであるにすぎない。かれらは、革命の戦艦を追ってうようよと集まってくる蚊の一群に似ている。このようにして、アナキズムの歴史的寿命は、ほとんど終りを告げているのである。」 176P

「他方、ロシアにおける大衆ストライキは、労働者階級の政治闘争とくに議会闘争を回避して、急転直下、いきなり社会革命にとびこむための手段などではけっしてなく、なによりもまず、プロレタリアートのために、日常の政治闘争の条件、とくに議会闘争の条件をつくり出す手段だったのである。大衆ストライキをもっとも重要な武器としてきたロシアの革命的闘争は、はたらく人民とりわけプロレタリアートが、政治上の諸権利や諸条件をかちとるために行なう闘争であった。この労働者の政治上の諸権利や諸条件が、労働者階級の解放闘争においていかに必要であり、いかに大きな意義をもっているかは、マルクスとエンゲルスがいちはやく指摘したところであり、かれらが第一インターナショナルでアナキズムに対抗して全力をあげて闘ったのも、まさしくこのためであった。したがって、これまでの大衆ストライキの観念と不可分に結びついていたアナキズムが、今日では大衆ストライキの実践そのものと対立することになってしまい、逆に、これまでプロレタリアートの政治活動に対立するものとしてつよく非難されていた大衆ストライキが、今日では政治上の諸権利を獲得するための政治闘争のもっとも強力な武器だと考えられるにいたったが、このことはマルクスの社会主義の全教理の基盤ともいふべき史的弁証法の必然的な帰結であるといえよう。ロシア革命が大衆ストライキについてのマルクス主義の古い立脚点に根本的な修正を加えることを余儀なくさせたとしても、そのさい、一般的な方法と観点をあたらしい形態に適合させることで勝利をおさめるのは、マルクス主義者だけである。」 176P

II アナキストの大衆ストライキと自然発生的ストライキ

「かれら（アナキスト）の「革命的」思考の素材的前提条件としては、ただ二つのことがあるにすぎない。ひとつは、空想的気分、そしてもうひとつは、今日の資本主義の涙の谷から人類を救い出そうとする善意と勇気である。この空想的気分にひたった思弁のなかから、すでに六〇年もまえに、大衆ストライキこそ、よりよい社会へもっとも手近で確実に、もっとも容易な手段である、という考えが生まれていた。また最近では、組合闘争だけが真の「直接的大衆行動」であり、これが唯一の革命的闘争である、といった考えも、このおなじ空想的気分のなかから生じている。とくに後者は、フランスやイタリアの「サンジカリスト」の最新の珍案としてよく知られているものである。これはアナキストにとって致命的なことであるが、空想的気分にひたって思いついた闘争方法などは、いつも、とらぬ狸の皮算用であり、純然たるユートピアであるにすぎないばかりか、かれらは、こ

のいやしくて醜悪な現実をいささかもかえりみようとしないために、この醜悪な現実のなかでは、革命的な投機性によって、しらずしらずのうちに、実際には、かえって反動のために協力するという結果になっている。」 177-8P

「ロシア革命がわれわれに何かを教えるとするならば、それは、なによりもまず、大衆ストライキは、けっして人為的に「行使」されたり、盲めっぽう（ママ）に「決議」されたり、「宣伝」されたりするものではなく、歴史的必然性をもって、一定の契機のもとに、社会的諸条件のなかから生まれてきたひとつの歴史的現象である、ということであろう。／それゆえ、問題を的確にとらえ、討議するためには、大衆ストライキが可能であるとか、不可能であるとか、有用であるとか、有害であるとか、抽象的に思弁をもてあそぶことではなく、階級闘争の現段階で大衆ストライキが起きた契機と社会的諸条件を追究するほかない。換言すれば、願望の見地から大衆ストライキに主観的判断をくだすことではなく、歴史的必然の見地から大衆ストライキの源泉に客観的な検討を加えることが必要なのである。」 180P（下線は、本文では斜め傍点、以下同様）

「いまでは、大衆ストライキは、ドイツをはじめインターナショナルな労働者階級のいきいきした関心の的になっている。なぜなら、これは、まったくあたらしい闘争形態であり、つまり階級闘争の条件のふかい内的な変化の確実な徴候となっているからである。ドイツのプロレタリアートが——組合指導者の頑迷な抵抗などを無視して——このあたらしい問題にきわめてつよい関心を示しているのは、かれらの健康な革命的本能といきいきとした知性を証明している。」 181P

「イェーナ大会の決議の核心は、ドイツの現状では国会議員選挙権にたいする反動的支配層のやみうちがかならず嵐のような政治闘争の時期への契機と合図になるであろうし、そのときにはドイツにおいても、闘争手段としての大衆ストライキがはじめて使用されるようになるであろう、ということである。」 181-2P

「イェーナ大会の決議のなかで、ドイツ社会民主党は、ロシア革命がプロレタリア階級闘争のインターナショナルな条件におよぼした根本的变化を公式に承認し、階級闘争のきたるべき局面でのあらたな要求にたいして、党には適応能力と革命的発展能力があることを表明したのである。ここにイェーナ大会の意義がある。」 182P

III ロシアにおける大衆ストライキの歴史

ドイツとロシアの比較。ドイツにおける政治ストとして計画、更に大衆ストライキ 182-3P
ロシアにおける大衆ストライキの概略 183-4P

「ロシア・プロレタリアートの内面的、政治的発展をしっているものは、だれでも、現在の大衆闘争時代の歴史が、このペテルスブルクでの一連のゼネラル・ストライキにはじまったものであることを認めるだろう。このゼネラル・ストライキは、その後さまざまな大衆ストライキのあらゆる主要なモメントを萌芽としてふくんでおり、すでにそれだけでも大衆ストライキ問題にとって、きわめて重要なものである。」 184P

一八九六年のペテルスブルクのゼネラル・ストライキ 184-6P

「・・・・・・一八九六年の最初のゼネラル・ストライキ以来、ロシア国内に激しい労働組合闘争がはじまったことである。この闘争の波は、ペテルスブルグからやがて他の地域にひろまり、社会主義のアジテーションと組織化に、まったくあたらしい局面をひらき、

それによって、その後の、表面上は墓場のように静まりかえってしまった時期にも、地下運動を通してプロレタリア革命を準備することになった。」 186P

一九〇二年の三月のコーカサス地方での革命 186P

一九〇二年一月、最初の真に革命的な反響としてのドン河畔のロストフのゼネラル・ストライキ 186-7P

一九〇三年春のゼネラル・ストライキ 187-90P

「偉大な革命のながれがこの偽りの旗をかかげた小舟を方向転換させ、否応なく革命的プロレタリアートの小艦隊の先頭に立たせたのである。」 188P

「ストライキ中の鉄道労働者は、ただちにこの二名の釈放を要求したが、受けいれられなかったので、列車を市から出さないことを決議した。停車場にはストライキ中の労働者が全員家族をつれて線路に座りこんだ。それは、まるで人の海だった。かれらは、一斉射撃の警告をうけると、胸をひらいて「射て！」と叫んだ。銃弾は無抵抗に座っている群衆にあびせられ、婦人や子どもをまじえた三〇から四〇の死体が地上に横たわった。この知らせが伝わると、キエフ全市は、その日のうちにストライキに立ちあがった。群衆は、虐殺された人々の死体を抱きあげ、大衆行進をはじめた。」 189P

「ニコライエフでは、軍隊が演習のために町から出てゆくまで運動の開始を見合わせよう、という社会民主党委員会の反対にもかかわらず、・・・・・・」 189-90P・・・*党の抑止をはねのけて民衆は進む、ほとんど自然発生性としての進展、ロシア十月革命のレーニン—トロツキーの武装蜂起を例外として。*

「部分的な経済闘争やちょっとした「偶発的」な事件の無数の小さな水路から、革命は、合流して、たちまちのうちに大海原と化し、帝政ロシアの南部全域を数週間にわたって奇怪な革命的労働者共和国に変えてしまった。」 190P

一九〇四年の初めの戦争の勃発と大衆ストライキ運動の休止期 190-1P

「こうして数年間、ブルジョア自由主義が政治の舞台の前面を占領し、プロレタリアートは、影の部分に追いやられていた。」 191P

一九〇四年一二月、バクーのゼネラル・ストライキから一九〇五年一月のペテルスブルクの大衆ストライキ 191-6P

「プティロフ工場の二人の労働者が合法的なズパトフ労働者同盟のメンバーであるという理由で誅首された。この処置が一月一六日、この工場の一〇〇〇〇の全労働者の連帯ストライキをひきおこしたのである。」「ペテルスブルグのプロレタリアートとの革命的連帯こそゼネラル・ストライキの原因であり目的であることが強調された。」 192P

「このばあいでもまた、あらかじめ組まれた計画や組織的な行動が、まず存在していたとは言えない。なぜならば、諸政党のアピールは、大衆の自然発生的高揚とはほとんど歩調をあわせることはできなかつたし、指導者たちは嵐のように進むプロレタリアートの大群衆のためにスローガンをつくろうとしても、とうていおいつけなかつたのである。さらに、いままでの大衆ストライキやゼネラル・ストライキは、個々に発生して合流した賃金闘争からおこったものであって、革命的情勢の一般的気分と社会民主主義的アジテーションの影響によって、賃金闘争が急速に政治的な示威行動に成長した。経済的契機と組合の分散的状态が出発点であり、包括的な階級行動と政治的指導はその結果であった。しかしこん

どの運動は、ちょうどその逆である。一月から二月にかけてのゼネラル・ストライキは、あらかじめ社会民主党の指導のもとに革命的な統一行動として起こされた。」192-3P

「この闘争は、あらゆる小ブルジョア的自由職業——商店員、銀行員、技術者、俳優、芸術家——をとらえ、また家僕、下級警察官からルンペン・プロレタリアート層にまで浸透し、同時に都市から田舎へ流れこみ、兵營の鉄門さえも打ち砕いたのである。」193P

「計画と図式による「整然とした規律のある」闘争を愛好する連中の理論、とくに、遠くから「いかになさるべきであったか」を見きわめることができると自認している連中の理論によれば、一九五〇年一月の政治的ゼネラル・ストライキが無数の経済闘争へ四分五裂したことは、明らかに「大きな誤算」であり、そのためにあの大行動は「衰退」し、「燃えあがった藁の火」のような一時の興奮におわってしまったのだ、ということになるロシア社会民主党は、革命に参加したのであって、革命を「創造」したのではない。革命の法則は、革命の過程そのもののなかではじめて学びとられるものなのだ。たしかに、社会民主党も、ゼネラル・ストライキの当初の激浪がなんらめざましい成果もなく潮のようにひいてしまったので、一時は困惑におちいった。しかし、このいわゆる「大きな誤謬」をおかした歴史は、お節介な学校教師の推論などにおかまいなく、じつは、このとき、不可避免であると同時に、その結果を予想することもできないほど大きな革命の偉業をなしとげたのである。」193-4P・・・党の後衛的性格

「ペテルスブルグ事件の強力な衝撃をうけて、一月にとつぜんおこなわれたプロレタリアートの一斉蜂起は、外に向かつては、絶対主義にたいする革命的宣戦布告を意味する政治行動であった。しかし、この最初の全面的、直接的な階級行動は、電気衝撃のように、幾百万の人びとにはじめて階級的感情と階級意識を呼びさまし、この意味で労働者階級の内部にきわめて強力な影響をのこした。幾百万をかぞえるプロレタリア大衆にとって、これまで数十年間資本主義の鎖にしばられて辛抱してきた自分たちの社会生活、経済生活の耐えがたさが、とつぜん痛切に意識されるようになったのは、この階級的感情のすみやかな覚醒のあらわれであった。ここから、この隷属の鎖をゆさぶり、ひきちぎろうとする全労働者の運動が自然発生的におこってくるのである。近代プロレタリアートのかぎりない痛苦は、かれらに血のとまらない古傷を思い出させた。」195P

「経済闘争も、ここでは、實際上、行動の崩壊や分散ではなく、たんに戦線の移動にすぎない。すなわち、絶対主義にたいする最初の全面的衝突が急速かつ自然に資本との総決算に移行したのであり、このたたかひの性格にふさわしく、個々の分散的な賃金闘争の形態をとったのである。政治的階級行動は、一月にゼネラル・ストライキが経済的ストライキに分散したから崩壊したのではない。むしろ逆である。与えられた情勢と与えられた段階のもとで可能な政治行動の中身を使い果たしてしまったのちに、政治的階級行動は経済的活動に分散し、いや、むしろ転化したのだ。」195P

「絶対主義は、ロシアでは、プロレタリアートによって打倒されねばならない。しかしそのためには、プロレタリアートが高度の政治教育と階級意識をもつことが必要である。これらの条件は、しかし、パンフレットやリーフレットの類いよって充たされるものではない。生きた政治の学校、つまり、現実の闘争から、そしてその闘争のなかでのみ、革命の発展過程のなかでのみ、習得できるのである。さらにまた、絶対主義は、「充分」な「努力」

と忍耐がありさえすれば、いつでも打倒できるというものではない。絶対主義の没落は、ロシアの社会の社会的・階級的発展のたんなるあらわれにすぎないのである。」 195P

「革命の社会的過程の底をながれる多様な底流は、たがい交錯し、堰きとめあい、革命の内的矛盾を増大しながら、それによって結局は爆発を促進し、また爆発の力を相乗的に増大するにいたるのである。」 196P

「絶対主義の打倒というという、外見上はきわめて明白でまったく機械的なこの問題は、しかし、このようにひとつの長期的な社会的過程の全体を必要とし、社会的な土台の完全な掘りかえしを要求するのである。最下位のものが上位に、最上位のものが下位に置きかえられ、外見上の「秩序」は混沌に、外見上の「無政府的」混沌はあたらしい秩序に転化する。」 196P・・・運動のドラスティック性

一九〇五年春から夏の経済闘争の時期

「賃労働と資本のますます激化した全面的相互対立は、人民諸階層ならびにブルジョア諸階層の境界をはっきりと区分するために、また、革命的プロレタリアートとならんで自由主義的および保守的ブルジョアジーの階級意識をつくり出すために、ひとしく役立ったのである。都市の賃金闘争が強力な専制主義的モスクワ産業党の結成に寄与したのも事実であれば、リヴォニアの激しい農民蜂起の焰が有名な貴族的農本主義のゼムストヴォ自由主義を急速な破綻に導いたのも事実である。」 196P

「社会民主主義の活発なアジテーションと指導によって、おくれればせながら都市プロレタリアートに一月のプロローグの全教訓を身につけさせ、革命の今後の課題を明確に把握する可能性を与えた。しかし、これと関連して、なお、永続的な社会的性格をそなえた他の成果があらわれている。すなわち、経済的、社会的、知的、各面にわたるプロレタリアートの生活水準の全面的向上である。」 197P

「このような、外から見れば革命の停滞期とみえる時期に、実際は、ロシア全土の内部において、革命の偉大な地下運動が、連日、休みなくつづけられているのだ。たえまない、はげしい経済闘争は、急速な近道をとおって、原始的蓄積ないし家父長的掠奪農業の段階から近代文明の段階へ資本主義を移行させた。現在では、ロシアの産業の実際の労働時間は、一一時間半労働を決めているロシアの工場法よりも前進しているだけではない。ドイツの現実の状態をすでに追いこしてしまっている。」 199-200P

「今日は八時間労働、明日は大量ロックアウトと数十万の労働者の飢餓。このはげしい急速な革命的上昇と下降のなかで、永続的であるがゆえにもっとも貴重なものは、革命が与える**精神的影響**である。プロレタリアートの飛躍的な知的文化的成長、それが政治闘争や経済闘争のなかでの、かれらのたえまない前進のための確かな保証を提供するのである。しかし、それだけではない。労働者と経営者の関係そのものが顛倒することを忘れてはならない。一月のゼネラル・ストライキ、およびそれにつづいた一九〇五年のストライキは、資本家的「家父長支配」の原則を事実上撤廃させた。すべての重要な産業中心地の大工場では、労働者委員会の制度がおのずから設けられ、この機関だけが経営者と協議し、あらゆる争議を解決した。最後に、もっとも重要なことがある。すなわち、外見的には混沌としたストライキであり、「無組織的」な革命的行動と見えるものが、一月のゼネラル・ストライキ以来、熱狂的な**組織活動**の出発点になったことである。歴史は、ドイツ労働組合と

いう幸福の家の戸口で、気むずかしい顔をして見張り番をしている官僚的俗物どもの鼻を、遠くから笑いながら、つまんでみせた。万一、ドイツで大衆ストライキのころみがおこなわれるようなことがあるとすれば、そのばあい、絶対不可欠の前提条件として、あらかじめ組織を難攻不落の砦のようにかためておかねばならない、とされているが、このような堅固な組織は、ロシアでは、逆にむしろ大衆ストライキのなかから生まれてきたのである。またドイツの労働組合の守護者たちは、たいてい、革命の旋風のなかにまきこまされると、組織は貴重な陶器のようにこなごなに碎けるのではないかと懸念しているが、ロシアの革命は、それとはまったく反対の光景をわれわれに見せてくれた。大衆ストライキと市街戦の旋風と嵐のなかから、火焰と閃光のなかから、労働組合は、ちょうどヴィーナスが波のあいまからあらわれるように、生まれ出てきたのである。新鮮で若々しく、力づよくはれやかに……」 200-1P

組合の形成 201-5P

「このようにして、一月のゼネラル・ストライキに端を発し、今日になってもまた終わらない、この大きな経済闘争は、革命の広大な背景を形成して、外にあらわれたさまざまな事件とアジテーションとを相互に関連させながら、あるときは、いくつかの地点で個々の爆発をひきおこし、またあるときは、大規模なプロレタリアートの一斉行動をもたらしたのである。そして、この背景のなかからつぎつぎに、はげしい焰が燃えあがった。」 205P

一〇月のペテルスブルグの八時間労働の強行をともなう実験「この八時間労働制は、そのときまで出来高賃金制のもとで一時間労働していた組織労働者にとって、いちじるしい賃金低下を意味した。だが、かれらはすすんでこれを受け入れたのである。こうして、一週間のうちに、八時間労働制は、ペテルスブルグのあらゆる工場、あらゆる職場を制し、労働者のよろこびは限りないものであった。」 206P

その後のストライキ 206-8P

「しかし、その間、一〇月には、ブリギンの提出した国会法案にたいする回答として、第二回目の強力な全面的大衆ストライキが、鉄道従業員を先頭にして帝政ロシア全土にひろがった。この第二回目のプロレタリアートの革命的大行動は、一月の第一回目のものとは、すでに本質的にことなつた性格をそなえている。政治意識という要素がこんどは、はるかに大きな役割を演じていたのである。」 206-7P

「みじかい憲政の夢とおそろしい覚醒のあとの騒然たる情勢は、ついに一二月、帝政ロシア全土にわたって、三度目の全面的大衆ストライキを爆発させるにいたつた。このときは、経過も結果も、前二回のばあいとは完全にことなつていた。政治闘争がもはや一月のときのように経済闘争に急激に分散することはなかったが、一〇月のときのように迅速な勝利をおさめることもなかった。」 207P

「こんどの大衆ストライキはあからさまな蜂起に転化し、モスクワでは武装労働者によるバリケード戦と市街戦が見られた。モスクワの一二月は、政治行動と大衆ストライキ運動の上昇線の絶頂に達したまま、多事多端だった革命の第一年をとじたのである。」 207-8P

「モスクワでの事件は、同時に、全体としての革命運動の論理的発展の現在のすがたと未来を示す、ひとつのテストケースであった。すなわち、革命運動は、不可避免的にあからさまな一斉蜂起によって一応の結末に達するが、しかしこの一斉蜂起といえども、その前提

となる一連の部分的蜂起を通らなければ、現実には起こりえない、ということを示している。そしてこれらの部分的蜂起は、それが部分的であり過渡的であるがゆえに、一応は外からみて部分的「敗北」に終わり、個々別々にとりあげて考えると「尚早」であったように見えるかもしれないのである。」 208P

一九〇六年ドゥーマをめぐる動きと空白 208-9P

「自由主義者の幕間劇は終わったが、プロレタリアートの劇はまだ再開されていない。舞台はしばらく空いたままである。」 208-9P

IV 大衆ストライキの生命をもった躍動

「この歴史（ロシアにおける大衆ストライキの歴史）を一瞥しただけでも、ドイツで通常なされている議論とはかけらほども似ていない光景が見えるはずである。最高委員会の決定にもとづいて慎重な計画のもとに実施される政治「行動」などという、ひからびた図式ではない。大衆ストライキとは、そんな硬直した空疎な図式ではなく、血と肉をそなえた、脈動するひとつの生命なのだ。それは、革命の巨大な骨組から切りはなすことのできないものであり、また逆に、無数の血管をとおして、革命の末端にまでむすびついている。」 209P

「ストライキ行動こそ、革命の脈動であり、もっとも強力な歯車なのだ。ひとこと言えば、ロシア革命に見られるような大衆ストライキは、プロレタリアートの闘争の効果をたしかめるためにぬけめなく考案された策略や手段ではなく、**プロレタリア大衆の運動方式であり、革命のなかでもプロレタリアートの闘争の現象形態である。**」 210P

大衆ストライキ問題を評価するための四つの一般的観点

一、個別的示威行動と有機的に結合されたストライキ

「大衆ストライキを一個の行為ないし個別的行動と考えることは、完全な顛倒である。大衆ストライキは、むしろ、幾年、幾十年にわたる階級闘争の長い道程をあらわす指標であり、ひとつの集合概念である。」 210P 個別的政治的活動的な例として 210-1P

「純粋に政治的示威的ストライキが演じる役割は、あくまでも副次的なものであり、いわば巨大な平面と平面のあいだに囲まれた個々の小さな点の役割にすぎない。……示威的ストライキは、闘争的ストライキとはちがって、きわめて高度の、党派性をもった規律と意識的な指導と明確な政治思想を見せてくれるものであり、したがって、図式どおりにゆけば、大衆ストライキとしては、最高の、もっとも成熟した形態であるはずなのだが、現実には、運動の初期にはたす役割がいちばん大きい。」 211-2P 例として 212-3P

「労働組合ケルン大会で「びっこの駄馬」（ママ）と名づけられたメーデーではあるが、……」 212P……ローザのまさに当事者性の問題なのに!?

二、政治的要因と経済的要因の関係

「今日のロシアにおけるプロレタリア的行動の本来の担い手である闘争的ストライキをしっかり観察してみると、このストライキのばあい、経済的要因と政治的要因をはっきり切りはなすことなど、とうてい不可能であることが、おのずからわかってくる。ここでもまた、現実のすがたから遠くへだたっているのである。純粋に政治的なストライキを論理的には労働組合的ゼネラル・ストライキから演繹し、そのもっとも成熟した最高の段階であるとしながら、同時にこの二つをはっきり区別しておこうとするペダンチックな見解は、ロシア革命の実際の経験によって根本的に否定された。」 213P 例として 213-4P

「運動は、全般的に見て、たんに経済闘争から政治闘争へという方向にすすんでいるのではなく、逆のばあいもある。大規模な政治的大衆行動は、いずれも、政治的な面で行けるところまで行きついてしまうと、あとはきわめて雑多な経済的ストライキに急変してしまうものである。このことは、大規模な大衆ストライキのひとつひとつについて言えるばかりでなく、革命全体にもあてはまる。政治闘争が拡大し、明確なかたちをとり、強化されていくにつれて、経済闘争のほうも、後退するどころか、むしろ政治闘争と歩調をあわせて、拡大し、組織をかため、強化されてゆく。両者のあいだには、完全な相互作用が存在するのである。／政治闘争のあらたな盛り上がりとあらたな勝利は、つねに経済闘争の強力な動因に転化し、経済闘争が起こりうる外的条件をつくりあげる一方、自分たちの状態を改善しようとする労働者の内的要求や労働者の戦闘意欲をたかめるものである。政治行動のあわだつ波のあとには、かならず、地味を肥やす沈殿物がのこり、ここから、経済闘争の無数の芽がもえてくる。こんどは、逆のばあいを考えてみよう。労働者と資本の、やむことのない経済的戦争状態は、すべての政治闘争が休止しているときにも、闘争のエネルギーを持続させ、いわば、プロレタリア階級の活力をつねにみずみずしくたたえた貯水槽となって、政治闘争にたえず新鮮なちからを供給している。経済的側面においてたゆまず続けられているプロレタリアートの鑿岩工事は、たえず個々の地点で尖鋭な衝突をひきおこしているが、予知できない大規模な政治闘争も、こうした個々の衝突のなかから爆発するのである。／ひとことで言えば、経済闘争は、政治闘争のひとつの結び目からつぎの結び目への媒介者であり、政治闘争は、経済闘争の土壌をゆたかにするための周期的な施肥である。原因と結果は、ここでは、あらゆる瞬間にその位置をかえる。したがって、大衆ストライキ時代の経済的契機と政治的契機は、ペダンチックな図式が主張するように、きれいに分離したり、排除しあったりするものではなく、むしろ、ロシアでのプロレタリア階級闘争のもつ、からまりあつたふたつの面をかたちづくっているのである。そしてこの両面の統一体こそ、大衆ストライキにほかならない。」214-5P・・・経済的契機と政治的契機の相作性

三、大衆ストライキと革命

「ロシアでの経過は、大衆ストライキが革命から分離できないものであることを教えている。ロシアでの大衆ストライキの歴史は、そのままでロシア革命の歴史にほかならない。」

215P

「革命を市街戦や暴動、すなわち「無秩序」という観点からのみ眺めようとするのは、警察の立場にほかならない。科学的社会主義の立場は、これとことなり、革命を、なによりもまず、社会の階級関係の徹底的、根本的な顛覆であるとみなしている。」216P

「階級社会の厚い壁と社会的基盤がゆらぎ、たえず変化しはじめる革命の時代であれば、プロレタリアートがおこなういかなる政治階級行動でも、従来無関心だった労働者層をまたたくまに傍観的な状態から奮起させることができる。」217P

「大衆ストライキという表現形態をとりながら、経済闘争を政治闘争に、政治闘争を経済闘争に直接転化することのできるような社会的条件は、革命によってはじめてつくり出せるのである。」217P

「現実には、大衆ストライキが革命を生むのではなく、革命が大衆ストライキを生み出す

のである。」 217P

四、大衆的ストライキの指導のイニシヤチヴの問題

「大衆ストライキが個々の行動ではなく、階級闘争のひとつの時期全部を意味し、また、この時期が革命の時期と一致しているという以上、かりにきわめて強力な社会民主党の最高機関が決定をくださったとしても、大衆ストライキが任意にひきだせるものでないことは、明らかである。自己の判断にもとづいて革命を演出したり、とりやめたりする決定権が社会民主党の手中にないかぎり、社会民主主義者の諸集団がいかに大きな情熱をもち焦燥感にかられているとしても、それだけでは、とうてい、ほんとうの大衆ストライキの時代を力づよい生きた民衆運動として展開することはできない。」 217-8P

「ほんとうの革命的ストライキの時代からは区別されるべきものである。たんなる規律と情熱のなかから生まれた大衆ストライキは、せいぜいのところ、ひとつの挿話として、つまり労働者階級の戦闘機分のあらわれとしての役割をはたすだけで、ストライキがすめば、状況はまたもとの平和な日常性のなかに逆もどりしてしまうのである。」 218P

「ロシアでのすべての大衆ストライキにおいて、推進力としてであれ、抑圧力としてであれ、例外なく自然発生的な要因が大きな役割を演じた。これはロシアの社会民主党がまだ若く、弱体だからではない。ひとつひとつの行動において、予測できないきわめて多くの経済的・政治的・社会的要素、全般的・地方的要素、物質的・心理的要素が同時にはたらいており、どのひとつの行動をとってみても、計画問題のように式を立ててかんたんに解くことなど、とうてい不可能である。革命とは、社会民主党を先頭にプロレタリアートが指導的な役割を演じているばあいでも、けっしてプロレタリアートの野外演習のようなものではなく、すべての社会的基盤を休みなく粉碎し、解体し、移行させつづける、はげしい不断の闘争なのである。要するに、ロシアの大衆ストライキにおいて自然発生的要因が主要な役割を演じたのは、ロシアのプロレタリアートが「無教育」だったからではない。革命というものが教師づらをゆるさないからである。」 219P

「革命の時代そのものが、この一見どうしようもない難問を解決してしまうとは、いったいどういうことなのか。それは革命と同時に大衆のなかにあふれんばかりの理想主義が呼びさまされ、いかに激烈な苦痛をもわすれさせてしまう、ということにほかならない。」 220P

「社会民主党は、革命時代のさなかにおいてもやはり**政治的な指導**はひきうけねばならない。闘争にスローガンと方向を与え、政治闘争の**戦術**をりっぱにととのえることが、このばあい、大衆ストライキの時期における「指導」のもっとも重要な課題である。つまり、党は、プロレタリアートの内在している力、すでに発現し活動しはじめたすべての力が、闘争のあらゆる局面、あらゆる時点で現実の力となり、しかも、その力が党の戦闘態勢のなかで発揮されるようにしなければならぬし、また、党の戦術を、果敢さと尖鋭さという点から見て、けっして実際の力関係の水準以下に立てることなく、むしろこの力関係に先行させなければならぬ。こういった指導は、もちろん、ある程度まではおのずから技術的な指導に変化する。社会民主党の、断乎として前進をめざす首尾一貫した戦術は、大衆に信頼感と自信と闘争意欲をよびますものだし、逆にプロレタリアートの力の過小評価にもとづいた、不確かな弱々しい戦術は、大衆をまどわし、意志消沈させてしまうものである。」 221P

V ロシアの教訓のドイツへの適用 (違いの強調への批判)

まず一般的に押さえられていること 222-3P

「ロシア革命では政治闘争と経済闘争のあいだにきわめて密接な内的連関があり、この二つを統一する表現形態が一連の大衆ストライキであった。しかし、これは、たんにロシアの絶対主義から生じた結果なのではあるまいか。労働運動のあらゆる形態とあらゆる表現が禁止され、ごく単純なストライキでさえ政治的な犯罪とみなされてきたような国である。経済闘争がつねに政治闘争になってしまうのは、論理的に当然の帰結といえよう。」「ロシアの労働者のいままでの生活水準がきわめて低く、しかもこの労働者の状態を改善するために、まともな経済闘争がひとつもなされていなかった、というロシアの状況のたんなる結果なのだ。」「ロシアが政治的に立ち遅れていて、なによりもまず東洋的専制主義を顛覆する必要があったわけだし、他方から見れば、ロシアのプロレタリアートに組織と訓練が欠如していたとも言えるのである。」 222P

問題の順次考察 223-30P

「ロシアでの経済闘争が革命と同時に始まったとするのは、根本的にまちがっている。」 223P 「革命前の帝政ロシアのプロレタリアートが例外なく窮民の生活状態にあったという観念にも、かなりの誇張が含まれる。」 224P

ロシアとドイツの差異の検証として、ドイツ側の検証 225-30P

「ドイツの労働者の実際の生活水準のほうをすこしつっこんで眺めるならば、両者の差異はさらに小さなものになる。」 225P ドイツの「**鉱山労働者の窮乏**」 225P 「**繊維労働者の窮乏**」「**家内労働者の窮乏**」「**既製服仕立工の窮乏**」「**電気労働者の窮乏**」「**鉄道従業員と郵便従業員のかがやかしい窮乏**」 226P 「**農業労働者の窮乏**」 228P

「われわれが、労働組合に組織された種々の工業部門や手工業部門の一覧表から眼を転じて、完全に労働組合闘争の外側におかれているプロレタリアートとか、あるいはかれらの特殊な経済状態を労働組合の日常闘争の狭い枠のなかにおしこめきれないでいるプロレタリアートの大群を眺めるならば、ドイツのプロレタリアートがロシアのプロレタリアートにたいして経済的に優位に立っているなどという俗説は、いちじるしく形を変えねばならぬはずである。」 228-9P

「革命的な情勢から生まれた、工業プロレタリアートの真の強力な仮借ない闘争ならば、どん底の階層もただちに反応し、正常な泰平な時代には労働組合の日常闘争の圏外に立っていたすべての労働者階級が、嵐のような全面的経済闘争にまきこまれてゆくことは疑いない。」 229P

「詳細に検討するならば、現在の革命のなかでロシアのプロレタリアートがおこなっている経済闘争のすべての問題点は、ドイツのプロレタリアートにとってもまた、きわめてアクチュアルであり、労働者としての存在の傷口にふかく触れるものばかりである。」 230P

「経済闘争と政治闘争の交互作用は、ロシアにおける今日の大衆ストライキの内的原動力であると同時に、プロレタリアートの革命的行動のいわば一種の調整機関となっているが、ドイツでも、これは状況そのもののなかから、ごく自然的なかたちで生じてくるはずである。」 230P

VI ドイツにおける大衆ストライキ問題と組織の関係

「この問題についての多くの労働組合指導者の態度は「大衆ストライキなどという、そんな冒険的な力だめしをしてみせるにはわれわれの実力はまだ充分ではない」といった主張に言いつくされている。」 231P

「しかし、一方、労働組合というものは、その他あらゆるプロレタリア闘争組織と同様、闘争による以外には、みずからを維持することができないのである。」 232P

「ロシアにおけるこのような現象のみごとな実例を見た。ロシアでは、それまでにほとんど組織されていなかったプロレタリアートが一年半の嵐のような革命闘争のなかで、広汎な組織網をつくり出したのである。」 232-3P

「闘争のなかでみずからの力をためし、闘争のなかからあらたに再生するという、これこそ、プロレタリアートの階級組織にふさわしいプロレタリアート独自の成長方法なのである。」 233P

「ともかく大衆闘争が成功するためには、なによりもまず、これが真の**民衆運動**になること、つまりプロレタリアートのもっとも広汎な層を闘争にひき入れることが必要である。議会主義の枠のなかでさえ、プロレタリアートの階級闘争の力の根源は、中核にあたる組織労働者ではなく、広汎な周縁部の革命的プロレタリア層なのである。」 233-4P

「組織が戦闘部隊をつくり出すだけでない。闘争が組織のために新兵をつくり出すことのほうがはるかに重要である。」 234P

「労働者階級の組織的中核としての社会民主党がすべてのはたらく人民の指導的前衛部隊であり、この組織が労働運動の統一や力や政治的透徹性の源泉となっているとしても、プロレタリアートの階級闘争を少数の組織労働者の運動として理解することは、けっして許されないことである。現実のすべての偉大な階級闘争は、かならず、もっとも広汎な大衆の支持と協力で根ざしている。この協力を計算にいれず、たんにプロレタリアートの軍隊の少数部分がくりひろげるみごとな分裂行進だけを目安にして階級闘争の戦術を編み出したとしても、そんなものは、はじめからみじめな失敗に終わるに決まっているのである。」

234P

「組織され、教育され、意識のすすんだ、ドイツの、あるいは他の西ヨーロッパ諸国の労働者階級にくらべて、無教育で、意識もおくれ、組織もほとんどつくられていない、若いロシアのほうが、はるかに強烈的な階級的本能をもっている、ということにほかならない。」

235-6P

「社会民主主義によって植えつけられた階級意識は、あくまで**理論的**なものであり、**潜在的**のものである。ブルジョア議会主義が支配する時代には、この階級意識が直接的な大衆行動となって発現することは、原則的にありえない。ここでは階級意識とは、要するに、選挙闘争のあいだ、四〇〇の選挙区で併行的におこなわれる同数の地域的行動と数多くの部分的な経済闘争、およびそれに類したその他の闘争の、観念的な総和にすぎない。階級意識が**実践的**なものとなり、**積極的**なものとなるのは、大衆自身が政治の舞台に姿をあらわす革命のなかにおいてである。三〇年間の選挙闘争や労働組合闘争がドイツのプロレタリアートに与えることのできなかつた「教育」を、ロシアのプロレタリアートは革命の一年で自然に身につけてしまった。」 236P

「ドイツにおける諸条件がこのような時代を成熟させる段階にさしかかったときには、今日まだ組織されていない遅れた層が、前衛分子にひきずられてゆくどころか、闘争のなかで、ごく自然に、もっとも急進的でもっとも精悍な要素となるであろう。」 237P

「党や労働組合の人為的な指令のもとに少数の組織労働者がおこなう示威的大衆ストライキなどというペダンチックな図式を棄てて、階級対立と政治状況が極度に尖鋭化したところから原初的な力をもって発生し、嵐のような経済的政治的大衆闘争、大衆ストライキに爆発する、真の民衆運動の生きたイメージを思い浮かべるならば、社会民主党の任務が、大衆ストライキの技術的準備や指導にないことは、おのずからわかってくるはずである。社会民主党の任務は、なによりもまず、運動全体の**政治的な統率**にあるのだ。」 237P

「社会民主党は、最大の啓蒙性と階級意識をそなえたプロレタリアートの前衛である。われわれが運命論者のように手をこまねいて、「革命的状況」が到来し、自然発生的民衆運動が天から降ってくるのを待つことは、できもしないし、許されてもいない。反対に、われわれは、事態の発展に**さきんじて**、現実の動きを**促進**しようと努力しなければならない。これは、われわれが勝手なときに、やぶからぼうに大衆ストライキの「呼びかけ」をおこなうことで、はたせる問題ではない。われわれは、なによりもまず、広汎なプロレタリア層にたいし、この革命的な時代の到来の必然性や、この時代を用意する**社会的要因**とその**政治的帰結**などを明らかにしなければならない。できるかぎり広汎なプロレタリア層が社会民主党の政治的大衆行動に参加し、逆にまた、この大衆運動のなかで社会民主党が真の指導権を確保し、**政治的な意味において**運動全体を統率すべきあるとするならば、党は、きたるべき闘争の時期には、首尾一貫した決然たる態度でドイツのプロレタリアートのために、あくまでも明快な戦術と目標を示すことができなければならない。」 237-8P

VII ロシアの大衆ストライキとドイツの連動性

「ロシア革命は、絶対主義の除去とブルジョア議会主義による近代的立憲国家の樹立を当面の課題にしている。」「この二つの西欧ブルジョワ革命（ドイツにおける三月革命とフランス大革命）と今日の東欧のブルジョワ革命のあいだに、資本主義の発展の一周期が完全に経過しているという事情であろう。」 238P

「あくまでもブルジョア革命であるこの革命（ロシア革命）が、主として、階級意識をもつ近代的プロレタリアートによって、それもブルジョア民主主義の没落を特徴とするインターナショナルな環境のなかで、遂行されるということである。」 239P

「ロシア革命のこの二重性（絶対主義への闘いとプロレタリアートの「人間らしい生活の確立」を目指す）は、経済闘争と制度闘争のふかい結合と交互作用というかたちをとっていた。この交互作用は、ロシアでのかずかずの事件を実例にして、われわれがすでに見てきたところであるが、これを適切に表現しているのが、ほかならぬ大衆ストライキであった。」 239-40P

「大衆ストライキが広汎なプロレタリア層を行動に結集させ、大衆を革命化し、組織するための、ごく自然な手段として登場する。これはふるい国家権力を土台からくつがえすと同時に、資本主義の搾取を阻止する手段となっているのだ。現在では、都市の工業プロレタリアートがロシア革命のたましいである。しかし、なんらかの直接的な政治行動を大衆的な規模で遂行するためには、プロレタリアート自身がまず結集しなおして、大衆を形成

しなければならない。プロレタリアートは、この目的のために、工場や仕事場や鉱山や精錬所から出てきて、かれらが日々資本の桎梏につながれながら、個々の職場において分断され粉砕されている現状を、まず克服しなければならない。大衆ストライキは、このようにして、プロレタリアートのあらゆる偉大な革命行動がとる第一の自然な衝動的形態となるのである。」 240P・・・ここから現代的に生み出す新しい方法は？

「こう見てくると、大衆ストライキが絶対主義から生まれたロシア特有の産物などではなく、資本主義の発展と階級関係の現段階から生じたプロレタリア階級闘争の一般的な形式であることは、明らかである。」 241P

「(ロシアの)ブルジョア革命がまったく弁解の余地のないほど遅れてしまっていたために、かえって、このもっとも立ち遅れた国が、ドイツその他のもっとも進んだ資本主義諸国のプロレタリアートにたいして、これからの階級闘争の道筋と方法を教えているのである。」 242P

「ドイツの労働者は、ロシア革命を**自分自身の問題**と考えることを学ぶべきである。それも、たんにロシアのプロレタリアートにたいするインターナショナルな階級連帯の意味においてではなく、なによりもこの革命を**みずからの社会史および政治史の一章**と考えることをまなばねばならない。」 242P

「ロシア革命は、インターナショナルな労働運動、とくにドイツの労働運動の実力と成熟度をはっきり映し出しているのである。」 243P

「ドイツではもはや**ブルジョア革命**など問題となりえない。したがって、ドイツで公然たる政治的人民闘争の時代がはじまったばかり、歴史的必然の最終目標として問題になりうるのは**プロレタリア独裁**しかないのだ。」 245-6P

「しかし、われわれが描いた展望には大きな矛盾がなかつただろうか。一方では、きたるべき政治的大衆行動の時期には、なによりもまず、農民労働者、鉄道員、郵便局従業員など、ドイツ・プロレタリアートのもっとも遅れた層が、団結権を獲得し、搾取という最悪の癌をまず除去しなければならない、ということであった。他方、この時期の政治課題は、はやくもプロレタリアートによる政治権力の奪取である！ という。一方には、もっと身近な利益のため、労働者階級の物質的向上のための経済的組合闘争があり、他方には、すでに社会民主主義の究極目標がある。たしかに、たしかにこれは大きな矛盾である。しかし、これは、われわれの論理の矛盾ではなくて、資本主義の発展そのものの矛盾なのだ。資本主義は美しい直線をえがいて進むものではない。稲妻のような峻しいジグザグをえがいて進むのである。さまざまな資本主義国家がさまざまな発展段階を示すと同様に、個々の国の内部でも同一の労働者階級にさまざまな層がある。しかし、歴史は、おくれた国とおくれた層がもっとも進んだものに追いつき、全体が密集した隊列のようにシンメトリックに動きだすことができるまで、我慢づよく待ちはしない。状況が成熟するやいなや、最先端の露出した地点で、はやくも爆発を惹き起こすのである。そして、革命時代のあらしのなかで、わずかな日月のあいだにいままでの遅れをとりもどし、不均等を均等化し、全社会の進歩の足どりをまたたくまに突撃のかけ足に転じさせてしまうのである。」 246P

「ロシア革命においては、発展の全段階とさまざまな労働者層の利益が社会民主党の革命綱領に結合され、無数の部分的闘争がプロレタリアートの大規模な全面的階級行動に結合

されたが、ドイツにおいても、状況が熟するならば、同様の結果がみられるだろう。そのときの社会民主党の任務は、戦術の基準を発展のもっとも遅れた段階にあわせることではなく、もっとも進んだ段階にあわせることになるであろう。」 246-7P

VIII ドイツのこれから、党と労働組合との関係

「ドイツの労働者階級が待ちこがれている偉大な闘争の時期は、遅かれ早かれ、いずれ到来するであろうが、そのときになって、首尾一貫した確呼たる戦術とならんで、なによりも必要とされるものは、できるかぎりの行動力である。」 247P

「ところが、大規模な大衆行動を準備する段階の最初のごくおとなしいころみさえ、この点（統一の必要）ですでに重要な欠陥があることをさらけだしてしまった。欠陥とは、つまり、社会民主党と労働組合という労働運動の二つの組織が完全に分離し、独立している、という事実である。」 247P

「労働者階級の階級闘争に経済闘争と政治闘争という二種類の闘争があるわけではない。ただひとつの階級闘争があるだけなのだ。それはブルジョア社会の枠の中で資本家の搾取を制限することをめざすと同時に、搾取はもちろん、ブルジョア社会そのものを一挙に廃止することをめざす闘争である。」 248P

「これらは、たんに労働者階級の解放闘争の二つの局面、二つの段階をあらわしているにすぎない。労働組合の闘争は労働運動の現在の問題を包括し、社会民主党の闘争は未来の問題を包括しているのだ。」 249P

「労働組合が社会民主主義の一部であるという理論上の関係が、そのまま模範的なかたちで現実の生きた実践のなかに見いだされる国は、ほかならぬこのドイツなのである。」 251P

このことを三つの面からの考察「第一に挙げなければならないのは、ドイツの労働組合は直接に社会民主党から生まれたということである。」 251-2P「第二に、社会民主主義の理論が労働組合の実践の核心をなしている」「第三に、労働組合の指導者たちの意識からしだいに薄れて来ているが、**数量的**な面からみても、労働組合が現在もっている力は、社会民主主義の運動と社会民主党のアジテーションの結果である。」 252P

「これらのすべてのことが、階級意識をもった普通の労働者に、かれらが労働組合に組織されることが、そのまま労働者政党に所属することであり、社会民主主義的に組織されることだ、という感じを与えるまさしくこの点にドイツ労働組合独自の宣伝力の秘密がひそんでいるのである。労働組合の中央諸団体が今日の勢力に達しえたのは、けっして中立主義的な外見のためでなく、労働組合の本質がじじつ社会民主主義的であったからである。」

254-5P

「ドイツでは、社会民主党のほうが、労働組合の新兵養成機関になっているのである。」 256P

「社会民主党と労働組合のあいだの、いわゆる対立などは、このような状況のもとでは、組合職員の上層部と社会民主党のあいだのけちくさい対立にすぎない。しかし、これは同時に、労働組合の内部では、労働組合指導者の一部と組合に組織されたプロレタリア大衆の対立でもあるのだ。」 257P

「しかしながら、発展の弁証法（？）によれば、労働組合の成長に必要なこの促進手段も、やがて組織が一定の大きさに達し、諸条件が一定の成熟段階に達すると、その後の生長を阻害するような正反対のものに、変質してしまうのである。」 257P

「労働組合職員は、組合幹部としての活動が専門職業化し、平穏な時代の分散した経済闘争のなかで、当然、視野も狭く（ママ）なり、官僚主義におちいりやすく、融通のきかない考えをしがちである。」 258P

「社会民主主義は、真実の**全体**をとらえるのであって、当面の活動とその絶対的必要性を強調すると同時に、この活動の批判と限界をも重要視しなければならない。ところが、この真実の**半分**しか見ようとせず、全体のなかから日常活動の積極面だけをとりあげて、のこりは適当に切り捨ててしまうのである。」 258-9P

「**ゾンバルト**教授」 259P

「警察が労働組合にむりやり押しつけた、いわば強制的な政治の「中立性」のなかから、のちには、この中立ということが労働組合闘争の本質そのものに根ざした必然的なものであるという、いわゆる自然的中立の理論が出てきた。労働組合の技術的独立のほうも、元来は社会民主主義的に統一された階級闘争の内部での実践的分業にもとづいていたものが、やがて労働組合を社会民主主義の思想と社会民主党の指導からひきはなす継起となり、いわゆる社会民主党にたいする「同権」に変質したのである。」 260-1P

「このようにして、ここに、独特の事態が生まれ、下部、すなわち広汎なプロレタリア大衆のあいだでは、社会民主党となんらことなるところのない同じ労働組合運動が、上部、すなわち上級管理機構では、社会民主党から分裂し独立した第二勢力として、社会民主党と対立することとなったのである。したがって、ドイツの労働運動は二重ピラミッドという特殊な形態をとり、その底辺と主要部分は強固な一枚違和から成り立っているが、二つの地要点は、遠くはなればなれになっているのだ。」 262P

「労働運動の真の統一のための確証は、上部の労働組合指導部やその同盟機関ではなく、下部の組織されたプロレタリア大衆のなかに存在している。百万の労働組合員の意識のなかでは、党と労働組合は、事実上、**一体**であり、この二つの組織は、いわば社会民主主義のプロレタリア解放闘争がことなった形態をとってあらわれたものであるにすぎない。社会民主党と労働組合のあいだの摩擦をとりのぞくためには、当然、両者の関係を、こうしたプロレタリア大衆の意識に適合させる必要がある。言いかえれば、**労働組合をもう一度社会民主主義に結びつける**ことが必要なのだ。」 263-4P

「社会民主主義的労働者大衆は、そろそろ、自分たちの判断能力と行動能力を表現することを学んでもいい。そして、大きな課題をもった、きたるべき偉大な闘争の時代に立ち向かう資格が、自分たちに充分あることを、いまこそ、はっきり示すべきである。その時代のなかで行動の大合唱をおこなうのは、かれら大衆であり、指導部は、たんなる「スポークスマン」すなわち大衆の意志の代弁者でしかないのである。」 264P

この選集には、編集者・訳者の解説が付けられていません。各巻共通の「付記」があるだけです。ですが、訳者か出版社がつけたと思われる各巻の帯が参考になるので、抜き書きしておきます。

(この巻の帯)

「政治的大衆ストを領導しうる前衛党の建設へ 1905年、遂にロシア革命が爆発した。ドイツに革命が近づいている！ 指導者は何をしているのか。ローザの激しい弾劾がつづく

——大衆的ストライキ（マッセンスト）への大胆緻密な理論を展開しつつ労働組合のアナルコサンディカリズムを越え、大衆蜂起の地平を拓く。」・・・ローザの理論は、ローザも「前衛党」という文言は使っているのですが、「前衛党論」にはなっていないのでは？ 「マルクスレーニン主義者」からのとらえ返しになっているのでは？

インターネットへの投稿から

2020.8.5 障害学研究ネットワークMLへの投稿

Tさん、榊原さん、みなさんへ
三村です

Tさんの榊原さんの著書への刺激的な投稿に、本も読まないで、応答してしまったのですが、すでに購入していて気になっていた本だったので、読書計画を前倒して読み、読書メモを書き、わたしの「会報」に載せました。

<http://www.taica.info/adsnews-97.pdf>

いつものように反応が遅く、もう関心が薄れているかも知れませんが、心動いた方は一読ください。余りかみあった対話になっていません。なぜ、議論が起きないのかという投稿もあったのですが、ほとんどのひとがこのMLを情報交換の場と位置付けていることもあるのですが、そもそもなぜ学（わたしからすれば理論）をするのかという立場性の違いがあるからなのだと思います。

そういうところで、こういう展開の仕方があるというところでの論攷で、議論を深める、ちゃんと対話をかみ合わせる論攷にはなっていません。そういうこととして、読んでみてください。なお巻頭言は差別問題での先行研究のフェミニズム論争からとらえ返した「フェミニズム論争から障害学をとらえ返す——なぜ、マルクス派障害学は定立しなかったのか——」です。こちらも参考にしてください。

さて、一言だけ、今の社会の制度も法体系も未だに医学モデルで進んでいるし、今の社会システムが続く限りそこから抜け出せないとも、わたしは押さえています。ですから、「社会モデル」の意味と意義はあるのだと思います。もちろん、もっと論的な深化が必要で、新しい論も生みだしていく必要をわたしも思い続けています。

2020.8.14 「コロナウィルスの感染症対策」のつづき——やっている感を出すだけの無策

今年は、コロナウィルスでお盆休み——帰省にブレーキがかかっています。なのに、政治はすっかりお休みモードに入っています。またぞろ、陰性率やタイムラグのようなことをとりあげ、「検査数をむやみやたらに増やしても意味がない」という言説を広げようとしているのですが、感染拡大を食い止めるには、大幅な行動規制をするか、検査数を増やして陽性者に行動規制をかけるしかないのです。ちゃんと、いままでのことを振り返り反省しつつ、「検査数を増やす」と言っていることを、口先だけのことにしないで、実行しないと大変なことになります。

2020.8.14 規制の問題

自民党の国会議員のなかで、コロナウィルス関係の規制について「人権にかかわることだから慎重に」という意見が出ています。この間、数々の人権侵害のながれで、慣習をつぶし、悪法を作るというということにしか実行力を示してこなかった政権を支えてきたひとたちが何を言っているのか、という思いが湧いてきます。これは実は、経済に規制をかけたくないという、経済優先で人命やひとびとの生活という福祉のことを軽視してきたひとたちの、そもそもコロナウィルスの感染症対策の初期始動を誤り、そこから抜け出せていないひとたちの問題の焦点ずらしなのです。ひとは自らの動きに規制をかけられたいのではないのですが、それでも、多くの民衆は「自分が感染することよりも、感染させたくない」というところで自粛しているのですが、政治のやれることはとにかく検査を大幅に増やして、感染者の拡大にストップをかけることなのだと思います。

(編集後記)

◆月一回に戻していたのですが、前回は間に挟みました。で、今回はちょっと遅れるかと思っていたのですが、どうにか定期刊行日の18日に間に合いました。また、しばらく月一回に戻します。

◆今回の巻頭言、実はホームページの案内を書くつもりで居たのですが、読書メモが膨大にになって、急遽、コロナウィルスの感染症対策でうきあがってきている国家主義の問題での論攷にしました。何かこの間同じような文を書いているという思いもしているのですが、少しずつ、フィードバックしつつも、論点を整理しまとめあげていく作業になっているのではと、思っています。

◆「読書メモ」は、たぶん、一つだけの最長の読書メモです。ひとつひとつの原稿に対するメモを、一日分ずつ文にしたいたら、膨大な分量になりました。整理してコンパクトに、コメント中心に編集し直そうかともおもったりしていたのですが、そのままにしました。二回も「寄り道」して、そもそもの漠然としていた方針がふっとんだせいもあったのですが、これは、意図していたことではないのですが、いわゆる無自覚な意識として、ローザの思考、発想をざっくりとでもつかんでおきたいというところでの作業になっているのでとも思ったりしています。コメントもあまりないのですが、一応一連のローザ学習を終えたところで、押さえ直したいと考えています。

◆「インターネットへの投稿から」は、前号の障害学関係のこの元になったメーリングリストへの遅ればせながらの投稿と、引き続きの感染症対策についてフェイスブックへの投稿です。

◆コロナウィルスの感染症対策では、わたしも規制の問題とエゴイズムの問題でかなり錯綜していたのですが、なんとなくまとめあげてきているのではと思ったりしています。

反障害－反差別研究会

■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め

理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>